

中・近世の韓日関係史に関する認識の共通点と相違点

孫承喆

1. 序論
2. 主題別の記述傾向
3. 共通点と相違点
4. 相違点に対する韓国学界の研究成果
5. 結論

1. 序論

本稿の目的は、現在、韓日両国で一般人もしくは大学生に読まれている韓国史と日本史の概説書に、中・近世の韓日関係史がどのように記述されているのかを比較・分析しようとするものである。こうした作業は、中・近世の韓日関係史に関する記述において、現在両国間で学術解釈上違いがあると考えられている争点が何であり、その争点のうちどのような内容に共通点と相違点があるのかを正確に把握することによって、相互間の理解や認識を深めようとすることに目的がある。

比較対象書籍としては、韓国の場合は、『韓国史新論』(一潮閣、1999年、新修重中本)、『韓国通史』(乙酉文化社史、2003年、改訂版18刷)、『市民のための韓国歴史』(創作と批評社、1999年、初版3刷)、『再発見・韓国歴史』(経世院、2001年、初版12刷)を対象とし、日本の場合は、『詳説日本史研究』(山川出版社、1998年、2003年7刷)、『概論日本歴史』(吉川弘文館、2001年、2刷)、『教養の日本史』(東京大学出版会、2003年、2版8刷)、『Story 日本の歴史』(2002年、第1版第2刷)を取りあげる¹⁾。

中・近世とは、韓国の場合、高麗時代から朝鮮時代(開港前)までで、日本の場合は、平安時代中期以降から徳川幕府末期までで、おおよそ10世紀から19世紀半ばまでの時期に該当する²⁾。

両国の概説書で中・近世の韓日関係史の関連で主に扱っている主題は、韓国の場合は、麗・蒙軍の日本侵略、倭寇、朝鮮初期の対馬島征伐、三浦倭乱、壬辰倭乱、通信使などであり、日本の場合は、元寇、倭寇、朝鮮との通交、豊臣秀吉の朝鮮侵略、通信使、四口などで、両国でほとんど似たような主題について記述されている。

¹⁾ これらの書籍を比較対象に選定した特別な理由はない。ただ、筆者が何度か両国の有名な大手書店を訪れて調査した結果、容易に入手できたものであり、かつまた両国の学者に諮って選定したものである。しかし、日本の概説書として選定した『詳説日本史研究』と『Story 日本の歴史』は高校生のための受験用参考書であって、学術書ではないという指摘があった(討論記録参考)。

²⁾ 中近世の時期区分は、便宜上、韓日歴史共同研究委員会第二分科で扱う時期とした。

従って、この部分に対する比較分析は、現在韓日歴史共同研究委員会第二分科において研究されている主題〔偽使・壬辰倭乱(文禄・慶長の役)・通信使〕などについての問題意識を深めさせ、さらには歴史教科書記述をめぐる両国間の葛藤を解消して、今後、相互理解や認識を深めるための一助となるものと期待する。

2. 主題別の記述傾向

(1) 麗・蒙連合軍の日本侵攻(元寇)

1) 韓国の概説書

韓国の概説書の場合、麗・蒙連合軍の日本侵攻は『韓国通史』と『再発見・韓国歴史』に記述されている。『韓国通史』には³⁾、

蒙古干渉期に高麗国民が被った最も大きな苦痛や負担は、二度にわたる蒙古軍の日本侵略戦争だった。蒙古は早くから日本から朝貢を受けるために日本政伐を計画してきた。高麗が蒙古に屈服すると、蒙古は高麗を通じて日本に朝貢を催促した。高麗は両国を調停し、日本に対しては通好を勧め、蒙古に対しては海路による遠征の危険性を伝えた。高麗としては戦費の負担がのしかかってくる戦争の勃発を望まなかったからである。しかし、蒙古と日本は互いに譲らずついに戦争を引き起こしてしまった。… …二度にわたる蒙古の日本遠征で、高麗人が被った人命・物資の損失はいいよのない程に大きかった。

と記述され、麗蒙連合軍の日本侵略の原因と過程を説明している。侵略の原因については蒙古の日本に対する朝貢要請、高麗の調停、日本の拒絶と記述しており、遠征の失敗による高麗の損失を強調している。

一方、『再発見・韓国歴史』には⁴⁾、

元と講和を結んだ元宗(元宗、1259-1274)と次の忠烈王(忠烈王、1274-1308)の時代は、元による日本侵略のために高麗が兵船や軍隊を動員して多くの苦痛を被り、内政もかなり干渉されたが(註)… …

と記し、日本侵略のために高麗が苦痛を受けたとして、次のような註を付している。

元は日本征服のために征東行省という機関を置き、高麗の内政に深く関与しながら艦船や軍人、そして軍糧米を供出させるようにした。こうして1274年(忠烈王即位年)と1281年(忠烈王7年)の二度にわたり元と共に日本遠征に乗り出したが、日本の鎌倉幕府の抵抗や台風、そして高麗の消極的な態度のために失敗した。

³⁾ 韓祐勳『韓国通史』(乙酉文化社史、2003年、改訂版、18刷)、175頁。

⁴⁾ 韓永愚『再発見・韓国歴史』(経世院、2001年、初版、12刷本)、205頁。

つまり、麗蒙連合軍は、日本の抵抗や台風、そして高麗の消極的な態度のために失敗したと記述している。

2) 日本の概説書

元寇に関しては、四冊の概説書のうち二冊だけに記載されている。『詳説日本史研究』には⁵⁾、

1268(文永5)年、フビライは高麗を仲介として国書を日本に送り、朝貢を求めてきた。幕府は返書を送らぬことに決し、西国の守護たちに「蒙古の凶心への用心」を指令した。北条宗家の時宗(1251-84)が北条政村(1205-73)ら一門の長老たちに支えられて18歳の若さで執権の座につき、元への対応を指揮することになった。… …1274(文永11)年10月、元は忻都(生没年不詳)・洪茶丘(1244-91)を将とし、元兵2万と高麗兵1万を兵船900隻に乗せ、朝鮮南端の合浦(馬山浦)を出発させた。元軍は対馬に上陸して守護代の宗資国(?-1274)を敗死させ、壱岐・松浦を襲い、博多湾に侵入した。… …元軍は日没とともに船に引き返したが、その夜暴風雨がおこり、多くの兵船が沈没した。大損害をこむった元軍は合浦へ退却していった。この事件を文永の役と呼ぶ。… …1279(弘安2)年に南宋を滅ぼしたフビライは、1281(弘安4)年に2度目の日本遠征軍を送った。… …この事件を弘安の役といい、文永の役と合わせて、再度の元の来襲を元寇(蒙古襲来)と呼んでいる。

とあり、元寇の侵入過程やそれに対する応戦状況を詳細に記述している。しかし、戦争による高麗や日本の被害については言及されていない。

また、『Story 日本の歴史』では⁶⁾、

13世紀に入って大帝国を建設したモンゴルは、1231年以来繰り返し高麗を攻撃した。高麗側は激しく反撃したが、1359年には服属を余儀なくされる。その後、モンゴルが中国を支配して成立した元は、日本への侵攻を試みる(元寇1274年・1281年)。これに協力を強要された高麗国内の反モンゴル活動は、元の日本への侵攻を遅れさせた。

とあり、二度の侵略の事実と高麗国内の反蒙古活動について記述している。

(2) 倭寇

1) 韓国の概説書

『韓国史新論』には⁷⁾、

⁵⁾ 五味文彦、高埜利彦、鳥海靖 編『詳説日本史研究』(山川出版社、1998年、2003年、7刷)、147頁。

⁶⁾ 日本史教育研究会『Story 日本の歴史』古代・中世・近世史編、(2002年、第1版、第2刷)、133頁。

⁷⁾ 李基白『韓国史新論』(一潮閣、1999年、新修重中本)、221頁。

日本の海賊である倭寇の侵入が始まったのは既に高宗(1213年-1259年)の頃からだったが、頻繁に出没するようになったのは忠正王2年(1350年)以降である。倭寇は簡単な武装しかしていなかったが、船に乗って各地の海岸に上陸し、村落を襲撃した。このため農民は内陸に移住し、海岸地帯の肥沃な農耕地は荒廃していった。倭寇はまた、開京のすぐ手前の江華島までも襲撃しこのため開京は混乱した。… …

倭寇を防ぐために、数回にわたる外交交渉が日本と行われたが効果はなかった。日本政府自体が倭寇を抑える能力がなかったからである。しかし、崔瑩・李成桂・鄭地ら諸将軍の活動は倭寇の勢力を弱めることに成功した。また、崔茂宣が火筒都監で製造した各種の火砲で倭寇の舟を破壊して功績を上げた。特に、朴葦が倭寇の巢窟の対馬島を直接征伐した昌王元年(1389年)以降、倭寇は勢力が大きく弱まった。この倭寇の撃退過程で崔瑩・李成桂ら武将勢力が登場した。

と記しており、倭寇が朝鮮を襲撃する状況やこれを鎮圧する過程を概略的に紹介しながら、崔瑩・李成桂らが倭寇の撃退過程を通じて武装勢力として成長していることを記述している。しかし、倭寇による侵略の始まりや規模についての記述は曖昧である。

『市民のための韓国歴史』では⁸⁾、

禍王代初めの最大懸案は14世紀に入って急激に出没するようになった倭寇を退治することだった。倭寇はあちこちで酷い略奪を行い、税穀輸送網の漕運までも麻痺させるほどであった。高麗朝廷は日本の幕府に倭寇による略奪を根絶してほしいと要求したが、内乱に直面していた幕府が地方を統制できなかったものでこれといった成果がなかった。

とあり、倭寇の頻繁な出没と被害、高麗の外交努力や討伐などについて記述している。

一方、『再発見・韓国史』には、高麗末、新興士大夫の文化を記述する中で科学や技術の発達を説明しつつ、倭寇について記述している⁹⁾。

恭愍王の即位を前後する時期から、商業資本の発達にともなって没落した日本の下層武士が数十隻、または数百隻の船で中部以南の沿岸地方を略奪し、租税運搬船を襲撃して大きな被害を及ぼし始めた。これを倭寇と呼んだ。… … また、1389年(昌王1年)、慶尚道都元帥朴葦は、100隻の艦隊を率いて倭寇の巢窟の対馬島を攻撃し300隻の敵船を破壊して戦果を上げたが、これ以降倭寇の勢力は大きく弱まった。

ところで、同書では、倭寇を時期的に恭愍王の即位前後から商業資本の発達にともなって没落した日本の下層武士集団と規定している。

続いて『韓国通史』では¹⁰⁾、

⁸⁾ 韓永愚、権泰億、徐仲錫、盧泰敦、盧明鎬『市民のための韓国歴史』(創作と批評社、1999年、初版3刷)、163頁。

⁹⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、209頁。

¹⁰⁾ 前掲『韓国通史』、191頁。

李成桂は、当時激しさを増す倭寇を防禦・撃退して、さらに武名をとどろかせた。李は東北面元帥として江原・徳源などに侵入してくる倭寇を退け、恭愍王21年(1372年)、西江副元帥として江華に侵入して開京を脅かす倭寇を退け(禡王3年、1377年)、同年再び智離山に侵入した倭寇を大破した。その3年後の禡王6年には、尚州・善州などに侵入した倭敵を雪峰で大破して、李成桂の武名は全国的に広まることとなった。

とあり、李成桂の武名が倭寇鎮圧を通じて広く知られるようになったと記述している。

このように、韓国の概説書の倭寇についての記述は、主として倭寇の侵奪内容やこれに対する応戦を強調している。そして、その過程で崔瑩や李成桂ら武将勢力の成長を記述しているのが一般的な傾向である。

2) 日本の概説書

倭寇について『詳説日本史研究』では¹¹⁾、

このころ、倭寇と呼ばれた日本人を中心とする海賊集団が猛威をふるっていた。倭寇の主要な根拠地は対馬・壱岐・肥前松浦地方などで、規模は2-3隻のものから数百隻に及ぶ組織的なものまでさまざまであった。倭寇は朝鮮半島、中国大陸沿岸を荒らし回り、人々を捕虜にし、略奪を行った。困惑した高麗は日本に使者を送って倭寇の禁止を求めたが、当時九州地方は戦乱の渦中にあり、取り締まりの成果はあがらなかった。この14世紀の倭寇を前期倭寇と呼ぶが、その主な侵略の対象は朝鮮半島で、記録に明示されたものだけで400件に及ぶ襲撃があった。高麗が衰亡した一因は、倭寇にあったと考えられている。

とあり、前期倭寇を、日本人を中心とする海賊集団と記し、その重要な根拠地は対馬・壱岐・肥前松浦地方などで、規模は2-3隻から数百隻にいたるものまで様々なケースがあったと記述している。そして、朝鮮半島を400件以上襲撃し、それが高麗衰亡の原因になったとしている。

しかし、『概論日本歴史』には¹²⁾、

倭寇とは、中国の海禁政策のもとで形成された東アジアの私貿易・海賊集団であって、民族・国境を越えて連合していた。14世紀後半以来、これらの集団が人や物や技術の交流の主役になっていった。1350年以降、朝鮮半島で活発化した倭寇は、対馬・壱岐や北部九州などを拠点とする日本人や朝鮮人を主力とした。それから15世紀はじめにかけて、朝鮮半島・山東半島などを中心として、私貿易や略奪行為などをおこなっている(前期倭寇)。

とあり、倭寇を民族や国境を越えて連合した勢力と見て、1350年以降、朝鮮半島で活発化した倭寇は、対馬・壱岐・北九州を拠点とする日本人や朝鮮人が主力であったと記述している。

¹¹⁾ 前掲『詳説日本史研究』、179頁。

¹²⁾ 佐々木潤之介、佐藤信、中島三千男、藤田覚、外園豊基、渡辺隆喜 編『概論日本史』(吉川弘文館、2001年、2刷)、79頁。

そして、『Story 日本の歴史』では¹³⁾、

倭寇は東アジア三国の境界を活動領域としていた。現在と違ってこの当時は国家意識や民族意識は強くない、海洋と密接な関係を持つ諸民族が雑居するこの地域で、国籍や民族を問うことは無意味だが、現在の国籍からすると、倭寇は日本人や朝鮮人、あるいはその混血などを中心とする雑居集団といえよう。倭寇の活動は高麗滅亡の原因となった。

とあり、海洋と密接な関係のある諸民族が雑居する地域で活動し、現在の国籍から見ると日本人や朝鮮人、もしくはその混血を中心とする雑居集団と記述している。

(3) 朝鮮前期の通交関係

1) 韓国の概説書

『韓国史新論』では、対外政策において朝鮮前期の韓日関係を次のように記述している¹⁴⁾。

朝鮮初期にも倭寇の略奪行為は時々起こった。山が多く自分の土地で生産される農産物だけでは食生活を充足できない対馬島の倭人は、朝鮮が交易を拒絶すると海賊のような習性を発揮せざるをえなかった。世宗が、李宗茂に対馬島を征伐させたのはこの倭寇の根拠地を掃蕩しようとしたものだった(世宗元年、1419年)。

朝鮮の倭に対する強硬策の結果、損害を被ったのはむしろ倭人である。対馬島の宗氏は何度も使臣を送って謝罪の意を表わしたので、朝廷では制限つきの交易を許可して懐柔しようとした。そして、乃而浦(熊川)・富山浦(東萊)・鹽浦(蔚山)の三浦を開いて貿易を許し、三浦には倭館を置いて交易に便宜を図った。その結果、倭船が頻繁に三浦を往来して、多くの米穀や綿布を持ち帰った。しかし、これを制限しようとしたのが世宗25年(1443年)の癸亥約条である。… …その後、中宗5年(1510年)に三浦に居住する倭人が鎮将との衝突が原因で乱を起こした。乱が鎮定されて後、三浦を閉鎖して交易を絶ったが、対馬島主の哀願により再び中宗7年(1512年)に壬申約条を結び、癸亥約条に規定された歳遣船と歳賜米豆を半分に減らして、それぞれ25隻・100石に制限して交易を許可した。

当時、日本が必要として持ち帰った物品は、米穀・綿布・麻布・苧布などの生活必需品や螺鈿・陶磁器・花紋席などの工芸品、そして、大蔵経・儒教書籍・梵鐘・仏典などの文化財であったが、こうしたものは日本の文化に多くの貢献をした。これに対して、日本から持ち込んだ物品は、銅・錫・硫黄などの我国では産出しない、鉱物や薬劑・香料などの両班の奢侈品であった。

つまり、対馬島の厳しい自然環境による倭寇の持続的な出現、倭寇根絶のための対馬島征伐、その後対馬島から謝罪の使節を送って制限つきの交易を許可したこと、三浦を開港し癸亥約条を結んだ事実を記述している。続いて、三浦倭乱と交易の断絶、対馬島主の哀願によって壬申約

¹³⁾ 前掲『Story 日本の歴史』、130頁。

¹⁴⁾ 前掲『韓国史新論』、259頁。

條を結び交易が再開された旨を記述している。それから当時の交易品を紹介している。

一方、『韓国通史』では、倭寇の根絶や拉致された捕虜の送還、対馬島主に対する倭寇根絶の責任、および貿易統制権の付与、懐柔策(授職人制度)、対馬島征伐、三浦開港、癸亥約條、大蔵経請求、密貿易、三浦倭乱、壬申約條などについて比較的詳しく記述している。しかし、

世宗25年(1443年)には、対馬島主と条約を結び、歳遣船を年50隻に、歳賜米を米豆200石に制限した。特別な場合には、特送船を送れるようにし、別途に約定した者に対しては各自の歳遣船を送ることができるようにした。こうして対馬島主以外にも日本国王(足利将軍)や大小の豪族の使送船が往来できる余地を与えた。この条約を癸亥約條という。

とあり、癸亥約條の内容を拡大・解釈している¹⁵⁾。癸亥約條の内容には、足利将軍や大小の豪族に関する歳遣船約條が具体的に明示されていない。こうした内容は『海東諸国記』にのみ明示されている。また、

特に、倭使のほとんど全てが大蔵経や梵鐘などを求めにきて、これを賜与したケースも少なくなく、寺塔の营造・修理や仏事の募財のために使臣を派遣してくることもあった。このよな文化財の賜与は、日本文化の発展に少なからず寄与した。

とあり、大蔵経や仏具を求めた事実を記述し、朝鮮文化財の賜与が日本文化の発展に寄与したことを強調している¹⁶⁾。

また、[琉球・南蛮との交渉]では¹⁷⁾、

… … 朝鮮初期になって、朝鮮と琉球の交渉はさらに頻繁になった。琉球の酋長も日本のように毎年歳遣船を朝鮮に派遣し、朝鮮は琉球人に官職を与えて優待したこともあった。一方、朝鮮の船舶が琉球に漂着することも多かった。そのうちには朝鮮に送還される者もあったが、そのまま琉球にとどまって南蛮貿易に従事する者も少なくなかった。

とあり、琉球との交渉を具体的に記述している。しかし、琉球国王を酋長と表記したことや、朝鮮人が琉球に漂着し、琉球にとどまりながら南蛮貿易に従事したという記述はもう少し検証が必要である。

そして、朝鮮初期の対外関係の結論として¹⁸⁾、

¹⁵⁾ 前掲『韓国通史』、228頁。

¹⁶⁾ 同上、229頁。

¹⁷⁾ 同上、229頁。

¹⁸⁾ 同上、230頁。

朝鮮初期の対外関係は明に対する事大関係とその他の諸族に対する交隣関係である。それは、朝鮮が明から冊邦を受け、他の諸族に対しては授職・懐柔する政策でもある。このような儀礼的な関係とは異なり実質的な利害関係は“朝貢”貿易にあり、それは官貿易を主としながら若干の私貿易をともなうものであった。

とあり、事大と交隣関係の中で朝鮮の対日関係が成立していたことを説明している。しかし、朝日貿易の性格を完全に朝貢貿易と断定するには問題があり、私貿易の規模も相当なものだったことから、若干の私貿易という表現は曖昧な表現である。

一方、『再発見・韓国史』では、〔日本および東南アジア諸国との交流〕の項目を設定して記述しているが¹⁹⁾、

朝鮮王朝の領土拡張政策は南方にも及んだ。高麗末の恭愍王以降に食糧や文化財を略奪するためにやって来る日本の下級武士、つまり倭寇のために海岸地方は一日たりとも穏やかな日はなく、人々は山の中に隠れてろくに農業に従事できなかった。日本はそれほど食糧不足が深刻で、先進文明に対する欲求が大きかった。… …

侵略や略奪が難しくなったことに気づいた倭寇とその背後にある豪族は、平和的な貿易関係を要求してきた。朝鮮は日本との善隣のためにこれを承認し、釜山と昌原(乃而浦)を開港して制限付きの貿易を許可した。

とあり、前記の場合と同じように、倭寇を食糧や文化財を略奪するためにやって来る日本の下級武士と記述し、朝日通交が倭寇とその背後にある豪族の平和的貿易関係によって浦所を開港して行われたと記述している。

続いて、対馬島征伐や癸亥約條、交易品などを紹介し、倭人は生活必需品や高級文化財を必要とし、我が方は武器の原料や嗜好品が必要だったと記述して、

一方、日本の室町政府は、朝鮮の仏典〈大蔵經〉を入手するために使臣を送り、時には無理に要求することもあった(世宗6年、1424年)。朝鮮は複数の〈大蔵經〉を所有しており、そのうちの一つを渡したところ、これが日本の仏教発展に大きな影響を与えた。

とあり、大蔵經の賜与について記述しているが、大蔵經の請求は1424年だけではないことから大蔵經の要請や賜与に関してはもう少し概括的な記述が必要である。つまり、「朝鮮王朝実録」に記録されている大蔵經の要請に関する記事は、1394年から1539年までの間に正確に判明しているものだけでも請求回数は78回以上で、50帙以上の大蔵經や各種の仏典が賜与されている。

一方、琉球および東南アジア諸国との交流を次のように記述しているが²⁰⁾、

¹⁹⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、230頁。

²⁰⁾ 同上、232頁。

朝鮮と文物を交流する国は、女真、日本以外にも琉球(沖縄)、暹羅(タイ)、ジャワ(インドネシア)などの東南アジア諸国があるが、これらの国々は朝貢、もしくは進上の形式で各種の特産品[主に嗜好品]を持ち込んできて、衣服、布類、文房具などを回賜品として持ち帰った。特に、琉球との交易が活発で、大蔵経をはじめとして仏典、儒教経典、梵鐘、仏像を与え、琉球の仏教発展に寄与した。『朝鮮王朝実録』によれば、景福宮の前には日本や東南アジアの使臣で混雑したという。朝鮮は明国と肩を並べる文化輸出国の位置にあった。

とあるように、東南アジアとの交流を記述しながらも、文化優位国の立場を主張している。

以上のように、朝鮮前期の韓日関係についての記述は、倭寇問題から出発し、倭寇を通航者に転換しようとする努力、対馬島征伐、三浦開港、各種の通航規制および約條、三浦倭乱、交易品の紹介など具体的に記述している。しかし、共通して表れている特徴としては、困窮した倭寇もしくは倭人(日本)に対して規制しながら通航を許可してやり、対馬島主を通じて統制し、経済的に恩恵を与え、文化的には先進文化を日本に伝えて、日本文化発達に寄与したという方向で記述されている点が指摘できる。

2) 日本の概説書

室町幕府期の朝鮮との通航に関して、『詳説日本史研究』では²¹⁾、

朝鮮半島では、1392年、倭寇を撃退して名声を得た武将の李成桂(1335-1408)が高麗を倒し、李氏朝鮮を建国した。朝鮮も明と同じく、通航と倭寇の禁止を日本に求めてきた。幕府は直ちにこれに応じ、日朝貿易が始まった。1419(応永26)年、朝鮮は200隻の兵船と1万7000人の軍兵をもって対馬を襲った。これを応永の外寇というが、朝鮮の目的はあくまで倭寇の撃滅にあったので、貿易は一時の中断の後に続けられることになった。

とあり、通航の契機が、朝鮮や明が日本に通航を要求したことに幕府が応じて通航が始まったと記述している。そして、応永の外寇の目的が倭寇の撃滅にあったと記述している。続いて、[朝鮮との通航過程]を比較的詳しく記述している。次に、三浦の乱については²²⁾、

三浦に定住する日本人も増加し、15世紀末には3000人を数えた。彼らは種々の特権を与えられていたが、1510(永正7)年、その運用をめぐって暴動をおこし、朝鮮の役人に鎮圧された。これを三浦の乱と呼び、貿易はこのあとしだいにふるわなくなった。

とあり、三千人を超える日本人が特権を無視して暴動を起こしたと記述している。

²¹⁾ 前掲『詳説日本史研究』、180頁。

²²⁾ 同上、181頁。

『概論日本歴史』でも²³⁾、

〔朝鮮との通交〕 李氏朝鮮は、日本との通交のため倭寇の取締りを求めた。14世紀末に、その取締りを日本に要求した朝鮮は、日本との通交貿易を制限つきで許可した。それらの交易を管理統制する役割を対馬の宗氏に与えた。1419(応永26・世宗元)年、朝鮮は倭寇の根拠地をたたこうとして対馬を襲撃する事件があったが(応永の外寇)、16世紀半ばにいたり朝鮮への通交権はほぼ宗氏に独占されるにいたった。貿易品として、日本から銅・蘇木・硫黄・漆器などが輸出され、朝鮮から木綿・大蔵経・仏具などが輸入された。

とあり、朝鮮が日本との通交のために倭寇の取締りを求めたという。そして、朝鮮の国号を示す際、国号を記さずに李氏朝鮮という用語を用いている。ところで、現在韓国では李氏朝鮮という用語はほとんど用いていない。

『Story 日本の歴史』では、〔日朝の善隣時代〕という項目で両国の通交関係を記述している²⁴⁾。

李成桂は1392年早くも幕府に倭寇の禁圧を求め、西日本の諸大名にも同じ要請を行った。南北朝の内乱を終わらせて自信を持ちつつあった将軍足利義満はこれに応じ、この後、日朝政府の禁圧と懐柔政策によって倭寇は急速に減少していく。これを受けて日本国王(足利義満)と朝鮮国王は1404年、対等な善隣関係としての国交を開くことになった。600余年ぶりに開かれた正式な国交である。また両国は明を宗主国と仰いで冊封を受け、東アジアの国際関係は安定した。日朝間の交流はかつてないほどに盛んになっていく。

ところで、ここでは通交の契機は朝鮮の倭寇禁圧要求に応じた将軍や諸大名の努力によって成立したという点、1404年、日本国王と朝鮮国王は対等な善隣関係を結んで600年ぶりに国交を開いたという点、朝日両国が明からの冊邦を受けたのは東アジアの国際関係の安定を意味すると非常に肯定的に両国関係を記述している。

また、〔対馬と三浦〕という主題で²⁵⁾、

室町幕府は徳川幕府のいわゆる鎖国のような統制は未だできず、国家によって通交を一本化しなかった。……宗氏はもともと倭寇の中心的人物でもあったが、朝鮮から渡航証明書(文引)発給者の地位を認められ、日朝通交の元締めとなった。しかも幕府から守護職に任命されるとともに、朝鮮からも歳賜品として米や雑穀を年々与えられていた。かつての倭寇や海賊・商人などの有力者は、朝鮮に投降して形式上国王の臣下になり、通交権を与えられた。このため交易は朝鮮への朝貢とこれに対する回賜という形になり、日本側におおいに有利だった。

と記して、朝日通交での宗氏の役割について言及し、その他の有力者は朝鮮に投降して形式上は国王の臣下となって通交権を認められたので、交易は朝鮮への朝貢と回賜という形態になった

²³⁾ 前掲『概論日本史』、78頁。

²⁴⁾ 前掲『Story 日本の歴史』、134頁。

²⁵⁾ 同上、134頁。

が、日本側に極めて有利であったと記述している。このため、日朝間の通交は特異な形態を取り、国家間の使節交換のほか細川氏や大内氏らの有力守護大名や対馬島主宗氏、以前の倭寇や海賊・海商らがそれぞれのレベルで朝鮮国と関係を結んだと記述している。

続いて、〔銀と木綿〕という項目で²⁶⁾、

日本からは銅・硫黄金のほか南海貿易で得た蘇木・胡椒など、朝鮮からは木綿が交易品の中心だった。銅はやがて1530年代以後は銀に替わる。石見で鉱山が発見され、朝鮮から伝えられた「灰吹き法」という新しい精錬法で銀が大量に生産されるようになった結果である。木綿は戦国大名にとって兵士の衣料や鉄砲の火縄として、また帆布や魚網の材料としても必需品であったが、まだ国内生産は少なかった。朝鮮の木綿がその必要を満たしていたのである。文化面でも仏教の経典(高麗版大蔵経。現在韓国慶尚南道の海印寺にその版木が残る)・仏画・仏像、陶磁器などもたらされた。日朝間の交易は両者の利害関係から時には緊張を生み、三浦の乱(1510年、三浦の日本人が朝鮮側の規制強化に対して暴動を起こし、以後開港場は釜山のみになった)のような衝突も生み、また再度の倭寇の活動もあったりしたが、ほぼ室町時代を通じて継続された。

と記し、交易品の具体的な内容ばかりでなく、銀の精錬法が朝鮮から伝来した事実も詳しく記述している。しかし、三浦の乱を説明しながら、この乱の原因につき当初の朝・日間に恒居倭人数の約定がありこれを守らなかったことに原因があるのに、単純に朝鮮側の規制強化だけを記述している。

(4) 豊臣秀吉の朝鮮侵略

1) 韓国の概説書

豊臣秀吉の朝鮮侵略に関する記述を『韓国通史』を通じて具体的に考察してみる。

まず、戦争の原因について²⁷⁾、

……日本国内がほぼ統一される頃、豊臣秀吉が対馬島主を通じて朝鮮に対して国交樹立を要請する一方、明を征伐するために軍隊が朝鮮を通過できるよう要請してくると、朝鮮はこれを拒絶した。豊臣秀吉は朝鮮に侵攻する考えを抱き、軍人や船舶を徴発して準備する間、朝鮮政府は使臣二名を送ってその動静を探らせた。しかし、朝廷では二人の相反する見解を聞き、侵攻してくる兆候が見られないという見解に従ったため、防備を急がなかった。

とあり、豊臣秀吉の朝鮮との国交樹立要請と明を征伐するため朝鮮を通過することを拒絶したことにその理由を求めている。しかし、豊臣秀吉が朝鮮と国交樹立を望んだという記述は問題があり、これだけでは戦争の原因に対して十分な理解は得られない。

一方、戦争の進行過程について²⁸⁾、

²⁶⁾ 同上、135頁。

²⁷⁾ 前掲『韓国通史』、283頁。

1592年春、豊臣秀吉は15万の大軍を派遣し、海を越えて東萊城を攻撃させた。不意に侵攻された東萊城の朝鮮軍は必死に抵抗したが、鳥銃と弓矢との戦いとなり、防ぎきることができなかった。東萊城を陥落させた日本軍は三路に軍を分けて北上した。

と記し、続いて明の参戦や義兵の決起、和議会談や丁酉再乱について記述している²⁹⁾。

……明は朝鮮の請願によりその年の7月に満州にいた軍隊を派遣し、平壤の日本軍を攻撃したが、失敗した。その翌年正月、明将・李如松の率いる明軍は、平壤の日本軍を撃退して南へ追撃し、漢陽に迫ったが、碧蹄館で大敗して平壤にひき返した。日本軍はソウルにとどまった。……一方、国内各地では異族の侵寇に対する義憤から儒生や僧侶が決起し、これに続いて各地で民衆が義兵を起こした。彼らはふつう、名望のある前職官僚や儒学者の指揮を受けて日本軍を攻撃し、その後方を撓乱したり、占拠地から追い出したりもした。

……明軍と日本軍との間には相対峙する状態が続いたが、日本軍は明軍の和議に応じてソウルから撤収して南下し、慶尚道沿岸一帯に新たに城を築いて駐屯した。会談が完全に決裂した1597年に、豊臣秀吉は再び軍隊を増派し朝鮮に対する侵攻を図った。

……戦闘はほとんど膠着状態となり、一進一退を繰り返す間に豊臣秀吉が病死すると、日本軍撤収の遺命を下した。これによって日本軍は朝鮮南部から完全に撤収することになった。これを丁酉再乱という。露梁海上で日本軍の退路を塞いで殲滅しようとした李舜臣は不幸にも流れ弾に当たって戦死してしまった。こうして豊臣秀吉の傲慢さと貪欲によって引き起こされた7年にわたる戦争が終わった。

引き続き戦争の影響について比較的詳しく記述している³⁰⁾。

この戦乱で最も大きな損失を被ったのはいうまでもなく朝鮮であった。日本軍の殺戮や略奪によって多くの人命や財貨が損失を受けたのはもちろんのことである。多くの朝鮮人が日本に拉致され、耕作労働を強制されたり、奴隷として売買された。… …

戦乱にともなう田野の荒廃はその後の朝鮮社会に最も大きな被害を及ぼした。それは広範囲なもので、長期間にわたるものでもあった。… …

この他に文化的損失も少なくなかった。景福宮をはじめとする諸宮殿・官庁が失われ、弘文館の蔵書が焼失した。朝鮮歴代の実録など貴重な書籍を保管していた四ヶ所の書庫も全州を除く全てが焼失した。また、書籍・美術品など多くの文化財が略奪されたり、損傷した。

日本による不意の侵犯とそれがもたらした莫大な被害によって、国民の間には日本人に対する敵愾心が心の奥深く刻み込まれ、それはずっと後までも伝承された。

²⁸⁾ 同上、284頁。

²⁹⁾ 同上、285頁。

³⁰⁾ 同上、286頁。

戦争の被害を詳細に記述し、特に、戦争によって朝鮮人が深い傷を負い、これによって日本人に対する敵愾心がかかり後までも伝承されていることを強調している。

一方、戦争によって断絶していた両国関係が再開する過程と、戦争が日本文化に及ぼした影響を次のように記述している³¹⁾。

徳川家康が再び武人政権を樹立した後、朝鮮に国交樹立を求めてくると、朝鮮は一時期中断していた日本との国交を再開した。日本軍が強制的に拉致していった者の中には陶工がおり、かれらによってその後の日本の陶磁器は大いに発展した。また、日本人が持ち帰った朝鮮の活字が日本の活字技術の発展をもたらした。戦乱の最中に略奪していった多くの書籍は朱子学をはじめとして日本人の学問発展に大きな支えとなった。

『韓国通史』以外の概説書でも壬辰倭乱については似たような内容を記述している。つまり、壬辰倭乱の原因、経過、朝鮮の抵抗、明軍の派遣、和議交渉、丁酉再乱、朝鮮の被害などの内容が中心である。

ところで、このうち特異なのは、『韓国史新論』では、壬乱の原因について³²⁾、

… 戦国時代という混乱期を豊臣秀吉が收拾したためである。国内統一に成功した秀吉は諸将の力を海外に放出させて国内統一と安全をさらの強固にしようとした。さらに、海外に対する見聞が広がったことが刺激になって、豊臣秀吉の胸の内には大陸に対する侵略の野望が芽生えることとなったのである(279頁)。

とあり、豊臣秀吉の野望が戦争の原因になったと記述している。

また、『市民のための韓国歴史』には³³⁾、

日本人は、世宗以降、南海岸の三つの港(三浦)を利用した貿易にのみ依存し、朝鮮の米や布などを持ち帰ったが、その貿易量が制限されたので常に不満を抱いていた。中宗の時の三浦倭乱と明宗の時の乙卯倭変はそうした理由から起こったものである。従って、朝鮮を征伐しようという豊臣秀吉の主張は容易に大名の同意を得ることができた。参戦した大名に対して朝鮮の土地を与えることにした豊臣は、侵略の口実を見つけるために、明国を討つために道をあけるよう、いわゆる‘証明假道’を要求してきた。朝鮮がこのような途方もない要求を拒絶すると、豊臣は諸大名を動員して20万の軍隊を組織し、1592年4月に韓半島南部の釜山浦に上陸させた。

とあり、三浦倭乱と乙卯倭変を、朝鮮を征伐しようとする豊臣秀吉の主張と関連付けて説明しているが、この部分は不自然である。

一方、『再発見・韓国史』には³⁴⁾、

³¹⁾ 同上、287頁。

³²⁾ 前掲『韓国史新論』、279頁。

³³⁾ 前掲『市民のための韓国歴史』、205頁。

³⁴⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、311頁。

…国内統一に成功した豊臣は、地方勢力である諸大名の関心を国外に向けて、その余勢をかって大陸と韓半島を征服し、東アジアの征服者になろうという野望を抱くようになった。…

日本は朝鮮侵略の口実として、明を討つために道をあけるよう要請した。いわゆる‘征明假道’である。朝鮮はむろんこうした提議を拒絶した。1592年(宣祖25年)4月、約20万の倭軍が釜山を侵略した。

とあり、侵略の原因として、諸大名の関心を外に向けその余勢で東アジアの支配者になろうという野望を抱いたと記している。しかし、侵略軍の数字を他の書とは違って20万と記述している。

また、『再発見・韓国史』には、〔丁酉再乱と朝鮮の勝利〕という項目で³⁵⁾、

戦後7年間にわたる朝・日戦争は、朝鮮側の勝利で終わることとなった。日本は領土を得たわけではなく、朝鮮からの降伏を勝ち得たわけでもなかった。開戦当初は、我が方が苦戦したが、戦争が長期化するにつれ国民の潜在的な国防能力が発揮されて日本を圧倒するようになった。儒教の文治主義が国防を疎かにさせたのも事実だが、儒教によって養われた忠義精神や自尊心が国を守る精神的原動力として表れたためであった。

と記し、豊臣秀吉の朝鮮侵略を朝・日戦争という用語でよび、この戦争を朝鮮の勝利と規定し、朝鮮人の忠義精神や自尊心が国を守る原動力になったと記述している。

しかし、戦争の被害については³⁶⁾、

しかし、この戦争で最も大きな損害を受けたのは朝鮮側だった。全国八道が戦場と化し、数多くの人命が殺傷され、飢饉や病気で倒れた。大部分の土地台帳や戸籍が失われ、国家運営が麻痺状態に陥った。… 倭軍の略奪や放火による文化的損失が極めて大きかった。佛国寺や景福宮、書籍、その他の主要文化財が焼失、もしくは略奪された。そして、数万の人々が捕虜として連れて行かれ、長崎のポルトガル商人によってヨーロッパなどに奴隷として売られていった。日本にとっては、壬辰倭乱を通じて徳川時代に日本文化が成長する土台がつけられた。活字、絵、書籍を略奪し、有名な士人や優秀な活字印刷工を捕虜として連れて行き、性理学をはじめとする諸学問や印刷文化が発展することに寄与した。また、朝鮮から連れて行った李參平、沈當吉(沈壽官の祖先)らの陶工によって、日本の陶磁器文化が大いに発達することになった。かれらは日本の陶祖とよばれている。

と記し、戦争による被害を詳細に記述している。しかし、数万の人々が捕虜として捕らえられヨーロッパなどに奴隷として売られていったという記述は、もう少し具体的な論証が必要である。

2) 日本の概説書

朝鮮に関しては韓国の概説書と同様、四冊全てに記述されている。

『教養の日本史』では簡単な記述だが³⁷⁾、

³⁵⁾ 同上、315頁。

³⁶⁾ 同上、316-7頁。

³⁷⁾ 竹内誠、佐藤和彦、君島和彦、木村茂光 編『教養の日本史』(東京大学出版会、2003年、2版8刷)、135頁。

1592年(文禄元年)、秀吉は肥前名護屋を本陣として、15万余の大軍を朝鮮に出兵させた(文禄の役)。出兵当初は漢城をおとし入れ、国土の3分の2を占領したが、朝鮮義民軍の抵抗や明の援軍などのため戦局は進展しなかった。そのあいだ和議交渉がおこり秀吉の軍勢は撤退したが、秀吉は勘合貿易の復活、朝鮮の南半分の割譲を要求したため、講和は成立せず、1597年(慶長2年)、再度14万余の軍隊を出兵させた(慶長の役)。しかし、翌年の秀吉の死を契機として撤兵した。前後7年にわたる侵略戦争は、両国民衆に多大な損害を与え、豊臣政権崩壊の原因の一つとなった。

(註) 朝鮮侵略の経過については、北島万次『朝鮮日々記・高麗日記』(そしえて、1982年)を参照。

とあり、戦争経過を簡単に説明している。しかし、侵略のかわりに出兵という用語を用いている。続いて、北島万次氏の著書を参考文献として紹介している。

『詳説日本史研究』にも³⁸⁾、

1587(天正15)年、秀吉は対馬の宗氏を通して、朝鮮に対し入貢と明出兵の先導とを求めた。朝鮮がこれを拒否すると、秀吉は出兵の準備を始め、肥前の名護屋に本陣を築き、1592(文禄元)年、15万余りの大軍を朝鮮に派兵した(文禄の役)。釜山に上陸した日本軍は、新兵器の鉄砲の威力などによってまもなく漢城をおとし入れ、さらに平壤も占領した。このころ秀吉は、後陽成天皇を北京に移し、豊臣秀次を中国の関白に任命するという途方もない計画をいっていたが、まもなく李舜臣(1545-98)の率いる朝鮮水軍の活躍や義兵(義民軍)の抵抗、明の援軍などにより日本軍は補給路を断たれ、しだいに戦局は不利になった。

とあり、戦争の原因が朝鮮の入貢拒否や明出兵の先導拒否のためだとして、侵略のかわりに派兵という用語を使い、天皇を北京に移して、豊臣秀次を関白に任命するという無謀な計画を紹介している。

続いて、戦争の残虐性について³⁹⁾、

この戦いでは、秀吉が戦功の証として首のかわりに鼻をもち帰らせたため、兵士ばかりでなく 民間人に対しても鼻切りが行われ、戦後の朝鮮には鼻のない人々がちまたにあふれたという。(註: 日本に送られた鼻の一部は京都方広寺のかたわらに埋められ、現在も耳塚(実は鼻塚)の名で同地に残っている。)

と記し、日本軍の残虐性を暴露している。しかし、それ以外の戦争の被害については、“朝鮮人を戦禍の中に落とし入れ多くの被害を与えた”とだけ記述している。

一方、[日本軍の苦戦]という参考項目の中で⁴⁰⁾、

³⁸⁾ 前掲『詳説日本史研究』、227頁。

³⁹⁾ 同上、228頁。

⁴⁰⁾ 同上、228頁。

また慶長の役で最も熾烈をきわめたといわれる蔚山城籠城では、飢餓状態にあった城内に水商人や米商人が現れ、1杯の水を銀15匁、5升の米を判金10枚という途方もない値段で売りつけたという。秀吉の朝鮮侵略は、朝鮮の人々を苦しめたその日本軍にとってもまた地獄絵以外の何物でもなかったのである。

と記し、日本にとっても苦痛をともなった戦争だったことを想起させている。

『概論日本歴史』では⁴¹⁾、

首都漢城(現ソウル)を攻めとったとの報に、秀吉はアジア征服の大構想をたてた。しかし明の援軍を受けた朝鮮の義軍と民衆の抵抗は戦況を逆転させ、まもなく先鋒の将小西行長と明将沈惟敬とのあいだに和議がおこり、文禄2(1593)年、はげしい兵糧欠乏のなかで休戦し日本軍は引き上げた。

と記し、豊臣秀吉のアジア征服構想につき述べて⁴²⁾、

二度にわたる朝鮮出兵は、朝鮮におおきな被害を与え荒廃させた。それは領土の獲得、貿易の再開、明に対する国家主権の主張などを目的にしたもので、秀吉政権の内部対立の解決をもめざしていたともいわれる。

と記し、戦争の目的が領土の獲得、貿易の再開、明に対する国家主権の確立にあったと記述している。

その他、『Story 日本の歴史』では、[大陸征服の野望]という項目で⁴³⁾、

秀吉は小田原の北条氏を制圧して全国統一を完了した後、朝鮮の入貢と明への先導役を朝鮮国王に求め、それに応じなかったことを理由に、朝鮮出兵を強行した。1592(文禄元年)、肥前名護屋城に大城郭を築いて本陣とし、主に西日本の大名に命じて動員した15万8000人の軍勢を、釜山浦から順次侵入させた。秀吉の構想は、日本・唐(中国)・天竺(インド)の三国を征服し、天皇を北京に迎えて国都とし、諸大名や皇族に所領を分与し、秀吉自身は日中通商の要になる港湾都市・寧波に居所を定めて三国に号令する、という誇大妄想といえる構想であった。

と記し、戦争の理由として、朝鮮の入貢拒否や明への先導役の拒否、そして豊臣秀吉の誇大妄想的構想をあげ、朝鮮民衆に対する苦痛としては⁴⁴⁾、

第二次朝鮮出兵に当たって秀吉は、「ことごとく朝鮮人を殺し、朝鮮を空き地にせよ。首の代わりに耳や鼻を切り取り、戦功の証拠品として日本に送れ」と指示した。切り取られた朝鮮民衆の鼻は、塩漬けにして樽に詰め込まれ、「鼻受取状」が発行された。その数は10万個ともいわれる。

⁴¹⁾ 前掲『概論日本史』、118頁。

⁴²⁾ 同上、118頁。

⁴³⁾ 前掲『Story 日本の歴史』、166頁。

⁴⁴⁾ 同上、167頁。

と記して、日本軍の残虐性を記述している。

続いて、朝鮮が受けた被害や5－6万人に達する朝鮮人被虜が、日本儒学や陶磁器文化に与えた影響についても詳細に言及している⁴⁵⁾。

朝鮮が受けた被害は甚大であった。再出兵の際の日本軍はことに残虐で、兵員以外も無差別に殺戮の対象とした。諸大名が人々の鼻や耳を削ぎ、塩漬けにして日本に送り恩賞の証拠とした。田畑は荒廃し、戦前に朝鮮国家が把握していた約100万結(1結は肥えた土地で約1ヘクタール)の耕地は、戦後には30万結に減少した。日本に連行された人々は5万人から6万人に達したといわれる。その中には姜沆のように優れた知識人もいた。彼は朝鮮朱子学の大成者・李退溪の弟子で著名な儒学者であったが、京都に幽閉中、藤原惺窩と交友を結び、日本の儒学に影響を与えている。また多くの陶工が連行されてきた。陶磁器生産は高度な技術を要し、社会的有用性の高い重要な産業だったが、朝鮮は高麗の時代から優れた焼き物の産地として有名であった。… …以後日本は、陶磁器の産地として世界に知られるようになるが、逆に朝鮮の陶磁器産業は衰退した。文禄・慶長の役を「やきもの戦争」「茶碗戦争」などともいうが、それはこうした事情からである。

(5) 通信使

1) 韓国の概説書

通信使について、『市民のための韓国歴史』には⁴⁶⁾、

朝・日間の国交が再開されたのは倭乱が終わって9年後の1607年(宣祖40年)で、朝鮮は徳川幕府の要請を受け入れて通信使を派遣した。日本は、一つの州の一年分に当たる経費で朝鮮の通信使を歓迎し、全国が興奮と祝祭の雰囲気につつまれた。將軍継承の対外的公認と、朝鮮の先進文化の受け入れが日本側の目的だった。しかし、日本の使臣はソウル入京が認められず、東萊の倭館で事務的な手続きを終えて帰国しなければならなかった。朝鮮が日本に1811年までに12度にわたって通信使を派遣するなど、両国は平和関係を維持したが、外交・文化的に朝鮮が優位を保った。

とあり、その記述には多少問題がある。たとえば、朝鮮が幕府の要請を受け入れて通信使を派遣したという一方的な姿勢や、当時日本は幕藩体制だったので州と表現するのは適切ではない。また、新將軍就任の祝賀は妥当であるが、朝鮮の先進文化を受け入れようとしたという記述や、外交・文化的に朝鮮が優位を保ったという記述は再考すべきである。

⁴⁵⁾ 同上、192頁。

⁴⁶⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、207－8頁。

一方、『再発見・韓国史』では4頁にわたって通信使の江戸城入城の絵や通信使の全工程を地図で紹介するなど、詳しく記述している。まず、通信使の派遣過程をみると⁴⁷⁾、

戦争が終わった後、朝鮮は日本との関係を断絶したが、豊臣にかわって登場した徳川幕府は朝鮮との国交再開を要請してきた。… …しかし、朝・日国交は朝鮮が一段階高い立場で進められた。日本使臣〔差倭〕のソウル入京は認められず、東萊の倭館で実務を終えて帰国しなければならなかった。日本は、朝鮮の禮曹参判や参議に日本国王の親書を送り、使臣派遣を要請するのが慣例だった。これに従って、日本は約60回にわたって差倭を送ったが、朝鮮は1607年から1811年までに12回日本に通信使を派遣し、約250年間平和と関係を維持した。通信使の正使はふつう参議クラスから選抜されたが、日本に行くと同格の待遇を受けた。

と記し、朝鮮後期の国交再開が徳川幕府の要請によって成立し、朝鮮が一段階高い立場で進められたと記述している。そして、通信使が日本に行けば首相と同格の待遇を受けたと記しているが、首相が具体的に誰を指すのか曖昧な表現である。次に、通信使の役割については⁴⁸⁾、

日本は、全国民的な祝祭雰囲気の中で通信使を迎え盛大な饗応を行ったが、通信使の宿所には随行員から文章や書をもろうために押し寄せた群衆で人だかりができた。
… …通信使が一度派遣されると日本国内で朝鮮ブームが起り、日本の流行が変わるほど日本文化の発展に大きな影響を与えた。

と記し、通信使が日本文化の発展に大きな影響を与えたと記述している。さらに、通信使断絶の原因を、

日本において、18世紀後半以降、日本の国粹主義精神を高めるために<日本書紀>を新たに研究する国学運動が起こったのは、日本の知識人の間で朝鮮ブームに対する警戒心理が作用したからである。日本は19世紀に入ると、反韓的な国学運動がさらに発展し、1811年(純祖11年)の通信使は対馬島で接待して帰国させ、日本国民が通信使と接触することを阻んだ。こうして、この年を最後に友好的な朝・日国交と文化交流は幕を下した。

と記し、18世紀後半以降、日本の国学運動は日本知識人の朝鮮ブームに対する警戒心理が作用したもので、それが19世紀に入って1811年の通信使断絶の原因になったと記述している。それから、

⁴⁷⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、317-8頁。

⁴⁸⁾ 前掲『再発見・韓国歴史』、319頁。

日本に派遣された通信使は、日本で経験した見聞を記録し多くの見聞録を伝えている。これら見聞録は、日本は、文化は低い軍事強国であるという点や、再侵略の憂慮があるという点を指摘しており、朝鮮知識人の対日警戒心を高めた。朝鮮後期の海防論はこうした情報を基に現れたものである。また、〈日本書紀〉をはじめとする歴史書が入ってきて、これを古代史研究の参考にするといった現象も表れた。韓致齋の〈海東譯史〉はその代表的な事例である。

と記し、通信使を通じた日本認識や日本の影響についても言及しており、比較的最近の研究成果も紹介している。

2) 日本の概説書

通信使に関しては、韓国の場合とは異なり全ての概説書に記述が見られる。1980年代以降の研究成果を反映した結果と考える。

『教養の日本史』⁴⁹⁾、

近世の対外関係についてみると、まず朝鮮との通交は、文禄・慶長の役後断絶していたが、徳川家康と対馬の宗氏らの努力によって、1607年(慶長12年)に、はじめて朝鮮国使節の来日を見、1609年に対馬と朝鮮の交通の復旧を示す「己酉約条」が締結された。

その後、36年(寛永13年)には通信使が来日した。近世の通信使は、これ以前の三回の通信使も含め、将軍の代わりやその他の慶事に際して1811年(文化8年)までに計一二回の来日を見た。当時、朝鮮は、明の冊封を受けていたが、幕府は朝鮮を朝貢国なみに取り扱った。

とあり、通交回復が、徳川家康と対馬宗氏の努力によってなされたと記し、幕府は朝鮮を朝貢国とみなしたと記述している。現在、争点となっている記述である。

これに反して『詳説日本史研究』⁵⁰⁾、

朝鮮からは、使節が前後12回来日した。1回目の1607(慶長12)年から3回目の1624(寛永元)年までは、回答兼刷還使と呼ばれ、4回目の1636(寛永13)年から12回目の1811(文化8)年までが通信使と呼ばれた。回答兼刷還使というのは、日本からの国書に対して朝鮮国王が回答するという名目であり、刷還使とは、文禄・慶長の役で日本に連行されたままの朝鮮人捕虜の返還を目的にしていた。… …しかし、4回目以降はそれまでの日本に対する警戒心を解いて、信(よしみ)を通じるという意味の通信を使節の目的とするようになった。

とあり、回答兼刷還使は国書に対する回答と被虜人の刷還、そして通信使は信義を通じるという意味の使節と詳しく記述している。それから⁵¹⁾、

⁴⁹⁾ 前掲『教養の日本史』、153頁。

⁵⁰⁾ 前掲『詳説日本史研究』、247頁。

⁵¹⁾ 同上、248頁。

日本・朝鮮両国の親善関係を象徴する朝鮮使節の人数は、国書をもった正使と副使のほか、平均440名を超えたが、この一行は各所で国家の賓客として丁重に扱われた。その経費はオランダ商館長の自弁と異なり、沿道の大名家などの負担と地域の人々の国役負担でまかなわれた。そのため、天明の飢饉後は通信使の招へいは延期され、1811(文化8)年の12回目は、江戸ではなく対馬で迎える形がとられた。

と記し、前掲の『教養の日本史』とは異なり、一行が各地で国家の賓客として丁重に扱われたと記述している。非常に対照的な記述である。

『概論日本歴史』では、通信使の来訪だけを簡単に紹介しているが、『Story 日本の歴史』では⁵²⁾、

いわゆる鎖国下で海外の情報に乏しかった日本人にとって、中国と交通してその情報や文化を持ち、また儒学の先進国でもあった朝鮮の使節と接することにはおおきな意味があった。幕府の当局者のほか、諸大名、武士、町人や農民に至るまで一行に強い関心を示した。使節が宿泊する客館には面接を求め人々が集まり、詩文を交換したり筆談で情報をえようと。朝鮮側もこのことを意識し、使節には一流の文人を配して日本人の要求にこたえようと。した。

と記し、通信使は海外情報の乏しかった日本人に情報や文化を提供するきっかけになり、儒学の先進国だった朝鮮使節に接することに多大な意味があったと記述している。そして、通信使の歴史的意義について⁵³⁾、

通信使は近世の日朝間の平和な時代を象徴するものだった。しかしその背後で、双方は相手への蔑視観、自国を優位にみる中華意識を強く持ち続けていた。使節団の数が膨れ上がり、応接に贅を尽くしたのはそうした意識の反映でもあった。ことに日本においては江戸時代末、西欧諸国の圧力が増すと、危機意識とともに自国を神国視する傾向も現れ、それは周辺諸国への蔑視を強める結果になった。通信使の断絶にはこうした事情もはたらいていた。この頃、国内には朝鮮や周辺諸国への侵略論が現れはじめ、明治初年の征韓論につながっていく。

と記し、通信使の歴史的意義として、豊臣秀吉の朝鮮侵略後に断絶していた両国間の平和な時代を象徴したと指摘している。しかし、上代に対する蔑視観と自国を優位とみる中華意識によって、明治初年に征韓論がおこり、両国が再び不幸な関係になっていくとしている。

一方、両国の概説書のうち、唯一『Story 日本の歴史』において、朝日貿易の形態と倭館について記述しているが⁵⁴⁾、

⁵²⁾ 前掲『Story 日本の歴史』、194頁。

⁵³⁾ 同上、196頁。

⁵⁴⁾ 同上、195頁。

…貿易は対馬の船が朝鮮に出かけて行く「出貿易」で、ちょうどオランダ人や中国人が長崎の出島や唐人屋敷で行った「入貿易」と逆の形であった。交易場は釜山の草梁項に設けられた「草梁倭館」（あるいは倭館）で、ここが唯一の日朝間の交易・通交の場だった。倭館の広さは10万坪。長崎の唐人屋敷の10倍、出島の25倍あり、ここに館守・裁判・東向寺僧・代官などの役人のほか、500人ほどの日本人居留民が住んで、外交・交易に従事した。

倭館が、徳川時代に韓日関係の主要拠点で、韓日間の全ての往来がここを通じて行われたことを考慮すると、この記述は簡略すぎる。最近の研究成果が両国の概説書にあまり反映されていない代表的な事例といえるだろう。

3. 共通点と相違点

以上のように韓日両国の概説書の記述内容を考察してきたが、ここではその概説書に表れた韓日関係史に関する記述の共通点や相違点につき主題別に整理してみる。

第一に、麗蒙連合軍の日本侵攻に関し、韓国の概説書の場合は、四冊のうちの二冊だけに記述されているが、主として原因や過程について記されている。侵略の原因を説明するにあたっては、蒙古の日本に対する朝貢要請、高麗の調停、そして日本の拒絶というふうに記述しており、遠征失敗による高麗の損失を強調している。

一方、日本の概説書でも、二冊に記載されているが、そのうちの二冊は非常に簡略であり、もう一冊は非常に詳しく元寇の侵入やそれに対する応戦の状況を記述している。しかし、高麗や日本の被害に関しては言及はなされていない。以上のように、麗蒙連合軍の日本侵攻に関しては、記述の内容に違いがあるが特に争点はないと考える。

第二に、倭寇に関しては、韓国の概説書の場合は全てに記述されている。その主要内容は倭寇侵略の始まりや倭寇の規模、頻出地域や被害状況、高麗の外交努力や撃退過程、火砲の開発、朴葦の対馬島征伐、李成桂の武装勢力への成長などで、主として倭寇の侵略内容や被害、そして倭寇への応戦について記述している点が注目される。

これに比べて日本の概説書では、四冊のうちの三冊で倭寇を前期倭寇と後期倭寇に分類し、その構成や活動について記述している。ところで、『詳説日本史研究』では、前期倭寇を、日本人を中心とする海賊集団と記述し、その重要な根拠地として対馬・壱岐・松浦地方を挙げている。しかし、『概論日本歴史』では、倭寇につき、民族や国境を越えて連合した勢力と見て、1350年以降に朝鮮半島で活発化した倭寇は対馬や壱岐、北九州を拠点とする日本人や朝鮮人を主力としていたと記述している。そして、『Story 日本の歴史』でも、海洋と密接な係わりをもつ諸民族が雑居する地域で活動し、現在の国籍で言えば日本人や朝鮮人、もしくはその混血を中心とした雑居集団と記述している。

両国の概説書で、倭寇が高麗の各地域を襲撃し、略奪を行い、高麗ではこれを防ぐために外

交努力や武力での対応を講じたという点では共通して記述されている。しかし、倭寇の構成員に関してはかなり相反する記述がなされている。つまり、韓国の概説書は、倭寇は当然日本人、または日本の没落した下層武士と記述されているが、日本の概説書は、倭寇の活動地域を諸民族の雑居地域と見て、その構成も日本人、朝鮮人、もしくは混血の雑居集団と記述している。

第三に、朝鮮前期(室町時代)の通交関係については、両国の概説書で通交の現況をおおまかに記述している。通交開始の状況、三浦開港、対馬島征伐、各種の通交規制、対馬宗氏の主導、癸亥約條、三浦倭乱、壬申約條、交易品の紹介など、事実に忠実に記述している。しかし、韓国の概説書では、通交開始が対馬島主の哀願によって始まったという記述や、朝鮮の先進文化が日本文化の発達に寄与し、朝鮮人が日本へ行って首相と同格の待遇を受けたという記述が見られる。

一方、日本の概説書では、通交を朝鮮や明の方から要求してきたので幕府が応じたものと記し、三浦の乱の原因についても朝鮮による統制のみを記述している。他方、この時期の朝鮮と琉球に関する内容が韓国の概説書では紹介されているが、日本の概説書では記述されていない。そして、朝鮮前期の通交関係の重要な主題である偽使については両国の概説書で全く紹介されていない。

第四に、壬辰倭乱(秀吉の朝鮮侵略)に関しても、両国の概説書の記述はおおむね一致する。つまり、戦争勃発の原因や過程、戦争の経過(日本軍の進撃や漢陽と平壤の陥落)、明の参戦、義兵の決起、講和会談、丁酉再乱の勃発、李舜臣の応戦、豊臣秀吉の死、戦争の終結、戦争の影響(朝鮮の被害)などについて事実関係を記述している。

しかし、韓国の概説書では、戦争原因が豊臣秀吉の朝鮮入貢や征明假道の途方もない要求から始まった点、国家や民族の生存のために全国民が団結し侵略に対抗していった点、戦争の被害によって朝鮮人は深い傷を負いそのために日本人に対する敵愾心がその後長く伝承されている点を強調して記述している。そして、朝・日戦争という用語を用いて朝鮮側の勝利で戦争が終わったと記述している。

これに比べて日本の概説書では、侵略の原因として、豊臣秀吉の誇大妄想や日本国内の理由(領土の獲得、貿易の再開、明に対する国家主権の確立)だけを記述している。甚だしいのは、侵略のかわりに出兵、または派兵という用語を使用していることである。朝鮮や日本がこの戦争によって被った被害や侵略性に関する記述が簡略すぎるという印象を受ける。結論としては、両国の概説書が共に侵略戦争であるという認識には共通しているものの、その認識・記述方式にはまだ多くの隔りがある。

第五に、通信使に関連する記述であるが、朝鮮が幕府の要請を受け入れて通信使を派遣したとする一方的な表現がみられる。また、通信使の目的として、将軍代替わりの対外的公認というのは妥当であるが、朝鮮の先進文化を受け入れようとしたという記述や、通信使を通じて朝鮮が外交・文化的に優位を保ったという表現は一方的な記述である。

一方、日本の概説書『教養の日本史』では、通交の回復が徳川家康と対馬の宗氏の努力によってなされ、<幕府は朝鮮を朝貢国なみに取り扱った>と記述されている。他方、『詳説日本史

研究』では、『教養の日本史』とは異なり、＜一行は各所で国家の賓客として丁重に扱われた＞と記されている。非常に対照的な記述である。こうしたところで通信使に対する認識も大きく異なっている。

また、両国の概説書とも、朝鮮後期(徳川時代)約200年間、朝日通交の窓口だった倭館について記述していない。これは、両国の概説書が最近の研究状況を反映していないという証拠でもある。

4. 相違点に対する韓国学界の研究成果⁵⁵⁾

(この章は2004年6月の共同研究発表会での報告要旨を挿入したもの)

1) 倭寇の発生原因と倭寇集団の構成

まず、倭寇の発生原因についてみると、日本の学界では13世紀の倭寇が日本人の活躍であることを認めながらも、14世紀半ば以降の倭寇の猖獗や消滅の原因を高麗や朝鮮から導き出した。そして、こうした論理はそのほとんどが韓国側の史料だけを利用したということで十分な説得力をもつのが困難であった。

しかし、日本の史料である『青方文書』などを通じてみると、13世紀の倭寇出現は、日本の内海や九州の「海上武士団」の活動にその原因を見出すことができ、1350年「庚寅年倭寇」の出現は、観応の擾乱で九州が深刻な混乱に陥り、弱小な武士や住人が在地を離脱、海を越えて倭寇として活動した結果である。その後、1360年代の小康状態を破って70年代に急激に倭寇が増加したのは今川了俊と密接に関連している。つまり、1371年に今川了俊が九州探題に就いた翌年から倭寇の出没が急に増加し、1375年に少貳冬資が殺害された翌年から倭寇の出没が爆発的に増加した。これは、了俊が九州で探題専制権力を創出する過程で、在地を離脱した「反探題」勢力と探題権力の統制の外にあった海賊勢力、悪党勢力などの活動が原因であった。そして、1380年代半ばに次第に倭寇が減少していく理由は、下松浦地域の小領主や住人が自発的に定めた夜討・海賊などの禁止条項からもうかがえる。つまり、倭寇の出現と猖獗、消滅について、九州の政治的影響と勢力の再編、そして在地の安定やこれらの有機的関係の中で説明しなければならない⁵⁶⁾。

次に、倭寇問題で最大の争点になっている倭寇の民族構成について見てみよう⁵⁷⁾。

倭寇が日本人だけの集団であるという考えを否定する根拠は、『高麗史』や『高麗史節要』の倭寇船舶や動員された馬匹が大規模であるという記録や、水尺・才人などの高麗の賤民が倭寇を装ったという記録である。また、『朝鮮王朝実録』の李順夢に関する記事、済州島海民の倭寇関

⁵⁵⁾ 壬辰倭乱と通信使の韓国側の研究成果は、鄭求福、趙珽委員の報告書を参照のこと。

⁵⁶⁾ 倭寇の発生原因については、金ボハン「少貳冬資と倭寇の一考察」『日本歴史研究』13集、2001年、「一揆と倭寇」『日本歴史研究』13集、1999年、などの一連の研究がある。

⁵⁷⁾ 倭寇の構成主体については、南キハク「中世高麗・日本関係の争点：モンゴルの日本侵略と倭寇」『記憶の戦争』、梨花女子大学校出版部、2003年と、「高麗末期の倭寇構成についての考察」『韓日関係史研究』第5集、1996年などの一連の研究がある。

連説などである。しかし、こうした主張は次にあげる理由から再検討されなければならない。

まず、『高麗史』にみえる倭寇船舶が300隻や500隻という記述であるが、これは当時の対馬・壱岐・西九州・瀬戸内海の海上勢力の規模から見て、十分に動員できる船舶であり、大量の馬匹は倭寇が日本から輸送したか、もしくは高麗の馬を略奪したものである。

そして、高麗禎王代の禾尺、才人などの‘假倭’行為はどこまでも倭寇の侵攻によって触発された一つの現象であり、『高麗史』に‘假倭’と記録されている史料は、高麗末500回前後の倭寇関連記事のうちわずかに3件である。また、倭寇のうち朝鮮人を含む唯一の文献史料として引用されてきた朝鮮・世宗代の李順夢の‘倭寇構成員’に関する発言も、その意図が倭寇に対する説明ではなく、租税削減のための内容であり、当時の史料ではなく10年後の口伝であり、また、その人物評から見て信頼できない。よって、この1、2の史料だけで禾尺や才人が倭人と連合して倭寇となったとか、倭寇のうちに朝鮮人が多かったという記述は史料的根拠が充分ではなく、論理的飛躍である。

また、済州島の水賊の例を挙げて、済州島人が倭寇の重要な構成員だったという主張も、‘済州島の旌義縣の東側、大静縣の西側、竹島にも昔から倭船が密かに停泊した’という記録と、‘15世紀後半済州島海民が倭語を使用し、倭服を着てしばしば海賊行為を行った’という記事に根拠を置いているが、この記事も既に倭寇の全盛期からほぼ1世紀後の15世紀後半の史料で、高麗末の倭寇の活動とは時間的にかなりの隔りがある。従って、これら1、2件の史料だけで倭寇の民族構成を日本人・高麗・朝鮮人と拡大・解釈するのは再考すべきである。

結局、倭寇はいわば三島(対馬、壱岐、松浦)を含む九州から瀬戸内海、紀伊半島に至る広範囲な地域の子海賊や悪党によって構成されていたと見るべきで、最近の倭寇の構成を‘国籍や民族を超えた次元の人間集団’と捉える視点こそ、当時の現実からかけ離れ、加工された歴史像である。

2) 朝鮮国号の表記問題

1392年、李成桂によって新たに建国された王朝の国号は朝鮮である⁵⁸⁾。しかし、一部の概説書には、未だに李氏朝鮮という呼称を使用している。現在、韓国の学界では、「李氏朝鮮」という用語は日帝強占期に朝鮮を貶める‘李王朝’を意味するものと認識し、ほとんど使用しない。

もちろん、朝鮮という国号の認識問題につき見解の違いがないわけではない。つまり、朝鮮という国号が、1392年に百官会議で選定した「朝鮮」と「和寧」の2つの名称のうち、明帝が前者を選択して決定したため、国号の決定過程をみると非自主的で主体性が欠如していたというのである。しかし、このような判断は皮相的な観察である。なぜなら、国号の選定の背景には特記するだけの歴史意識や文化自尊意識があるからである。例えば、国号制定者である鄭道傳にとって、朝鮮とは檀君朝鮮と箕子朝鮮を意味する。鄭の解釈によると、檀君は中国の堯と同時代の人物なので、檀君が建てた朝鮮の歴史は中国最初の国である堯の歴史と同じというのである。そして、開国始

⁵⁸⁾ 国号の性格に関しては、韓永愚、『鄭道傳の研究』、ソウル大学出版部、1989年、参照。

祖の檀君は天神の後孫で、檀君朝鮮は中国と同様に天子国家の性格をもっている。また、箕子朝鮮は周文化の継承者なので、朝鮮は中国と対等な文化国家であるという自負心をもっている。

従って、国号選定過程に事大関係の儀礼的な行為以上の意味をもたせてはならない。中国は自国の存在を認識させる目的で朝鮮に事大の礼をとるように要求し、朝鮮は自国の安定と共存の友好関係のために中国を上国として認めたのである。これは、明が朝鮮国王太祖の即位を承認する文書によく表れている。つまり、承認文書には、“天が東夷国家をつくったが、我が中国が統治する所ではない。礼部からの回答には、王の教命を自由にし、天意に従い、人心を合わせれば東夷百姓が平安となり、辺境で問題が起こらず、使臣が往来すれば、実にその国の福となるだろう”⁵⁹⁾とあり、なんの異議もなく朝鮮が独立国であることを認定し、従来のように使臣が往来することを要請した。こうして朝鮮では中国と事大関係を結び、1403年に明から冊封を受けた。

中国に対するこうした立場は日本も同じであった。つまり、南北朝を統一した足利義満は、中国や朝鮮から文化受容や交易に対する欲求や、東アジア世界で日本を代表する統一政権として認められ、それを基盤に国内諸侯に政治的権威を誇示しようという目的から、明および朝鮮と公式的な通交関係の樹立を強く望むことになった。

こうして日本も東アジア国際社会の普遍的な外交規範であった冊封体制に編入せざるをえなかった。日本は1403年、明から金印「日本国王之印」を受けて、明の冊封国となった。これによって朝鮮と日本は明の冊封国として、国王対国王の対等な立場で通交を行うことになった。もちろん、朝鮮も日本も中国の冊封を受けたが、これが即、従属を意味しないので、両国の自主性と相反するものではない。

こうした意味で、太祖李成桂が新たに建国した国の国号が「朝鮮」なのであり、「朝鮮」という用語をそのまま使用しなければならない。「朝鮮」という国号は、日本側の史料(『古事類苑』、『善隣国宝記』など、室町時代や徳川時代の史料集)でも全てそのまま使用している。従って、「朝鮮」という国号がそのまま使用されるべきというのが韓国の学者の一般的な見解である。

3) 朝・日通交の性格

通交要求に関する記述も「朝鮮も明と同様に通交と倭寇の禁止を日本に要請してきた」として、朝鮮がまず通交を要請し、それを日本が認めたかのように記述しているが、これは完全に事実と反する⁶⁰⁾。

1392年、朝鮮では、建国直後に幕府将軍に使臣を派遣し、倭寇禁止を要請した。これに対して、幕府では足利将軍名義でなく僧侶の絶海中津の名義で朝鮮国王に答書を送ってきた。その書簡の中心内容は、幕府将軍が朝鮮側の倭寇禁王と被虜人の送還要求に積極的に応じ、両国の隣好を守ることを約束すること、そして、幕府将軍は朝鮮との通交を積極的に望んでいるが、将軍が直接外国に通問したことがなく、外交の一線に直接乗り出せないで、僧侶を通じて答書を送るということである。よって、この内容からみると、当時の室町幕府も朝鮮との通交を強く望んでい

⁵⁹⁾ 『太祖実録』巻2、太祖元年12月甲辰。

⁶⁰⁾ 朝鮮初期の通交の性格に関しては、孫承詒『朝鮮時代の韓日関係史研究』、知性の泉、1994年。

たことがわかる。

幕府将軍が直接、外交の一線に乗り出さなかったことにはいくつか理由があるだろうが、それはやはり幕府将軍による日本国内の統治が完全になされていなかったという点と、朝鮮に対する直接的な外交能力がなかったということに実質的な理由があった。そうしたなか、九州と大内氏に対する支配が可能になると、足利将軍は明と朝鮮との通交関係樹立のために、1403年に明から冊封を受けた。

さらに、1404年7月には、朝鮮に将軍名義の‘日本国王使’を派遣して朝鮮と正式な国交関係を樹立し、対馬島主を中間媒体として利用し、朝鮮との通交関係を樹立することになる。室町幕府時代の朝日関係をみると、朝鮮使節(回禮使・報聘使・通信使)派遣が17回であるのに対して、幕府からの日本国王使派遣は71回に達している。当時の使節派遣の目的だけ見ても、朝鮮使節は幕府将軍の倭寇禁止や被虜人の送還に対する回礼と答礼が主な目的だったのに比べて、日本国王使は大部分が通交要請と大蔵経請求であった。また、日本国王使の派遣が朝鮮に比べて多かった理由も、朝鮮側からの答礼が厚いので偽装使臣の偽使が多かったためである。

こうした内容は次に示す表を通じても間接的に確認することができる。

<朝鮮前期(室町時代)朝・日間の通交現況>⁶¹⁾

	1392-1419	1420-1433	1444-1471	1472-1510	1511-1592	計
室町幕府	16	7	12	11	25	71
本州・四国	42	43	91	144	28	348
九州	94	178	184	370	19	845
備前・一岐	112	91	355	605	3	1,166
対馬島	155	492	607	1,056	75	2,385
その他	13	7	5	2	2	29
計	432	816	1,254	2,188	152	4,842

つまり、幕府将軍以外にも各地域の地方勢力家が使節を送って通交を要請している。従って、室町時代の朝・日間の通交は、完全に日本側からの要請だった事実を確認することができる。そして、朝鮮ではかれらの無秩序な往来を統制するために、浦所を三浦に制限し、また、かれらを上京させて朝鮮国王に謁見させる上京制度を設け、対馬島主にかれらを統制できる権限(文引発行権)を与えて、日本からのあらゆる通交者に対して朝鮮の統制規定(『海東諸国記』)にそって貿易を許可しているのである。

特に、1443年、対馬島體察使・李藝が対馬島主・宗貞盛と結んだ癸亥約条は朝日関係の性格をよく表わしている。約条の中には、‘対馬島主には毎年300石の米と大豆を下賜する’、‘対馬島

⁶¹⁾ 韓文鍾、『朝鮮前期の対日外交政策研究』、全北大博士学位論文、1996年。

主は毎年50隻の歳遣船を送ることができ、やむなく報告することがある場合は、定められた数以外の特送船を送ることができる’という項目がある。約条の内容は2項目だけが知られているが、島主に対する歳遣船、特送船、歳賜米豆を定めたのである。歳遣船には日本使節とともに貿易品が積まれていた。よって、歳遣船数は、朝・日貿易量と両国の貿易収支と関連があり、朝鮮ではこの数を制限して貿易量を統制した。こうして派遣された歳遣船は15世紀後半になると年間400隻に達している。

以上の内容を総合的に見ると、朝鮮から通交を要求したということと、幕府がこれに応じたという記述は歴史的事実と完全に異なることがわかる。そして、こうした記述は、明に派遣した遣唐使によって日・明貿易が展開するという点において、中国の部分にも同様に適用される問題でもある。

4) 対馬島征伐および三浦倭乱

対馬島征伐や三浦倭乱について、“15世紀の初めには朝鮮が200隻の船と1万7千名の兵で対馬を襲撃する事件がおこった。…しかし、16世紀の初めに朝鮮の港に停泊していた日本人が官吏の扱いに反発して暴動を起し、鎮圧される事件が起こった。以降、朝鮮との貿易は振わなくなった”と記述している。

この部分についても、1419年に対馬島征伐が倭寇の略奪に対する朝鮮側の正当な懲罰であったにもかかわらず、対馬島征伐の歴史的背景や理由についての説明無しに一方的に襲撃とだけ記述している。そして、1510年の三浦倭乱の原因は、三浦の恒居倭人が60戸の約定を破って居留者が約3,000人に増えて、むやみに境界の外に出たことに端を発しているのに、単純に朝鮮側の統制だけを理由に挙げている点を指摘している。

まず、対馬島征伐について見てみよう。1418年の対馬島主・宗貞盛の死によって対馬島の内紛が起こり、再び倭寇が発生した。こうして飢饉によって生活が苦しくなった対馬島民は、再び倭寇となって1419年5月に倭船50余隻で忠清道庇仁縣に侵入し、兵船を焼いて略奪を行った。さらに、黄海道延平島に再度侵入して遼東半島に向った。そこで、太宗は、倭寇の主力が対馬を空けた隙に征伐を行うことを決定し、都體察使・李従茂に対して、戦艦277隻に兵17,285名と65日分の食糧を積み込ませて対馬島を攻撃させた。李従茂の征伐軍は、1419年6月20日、浅茅湾を攻撃した後、倭寇の巢窟と考えられていた各地を討伐した。

このとき倭寇の主力部隊は、朝鮮を経て遼東地方で略奪行為を行っていたため対馬島にはいなかった。この時、台風が予想されたため対馬島主を問責した後、7月3日に巨濟島に帰還した。従って対馬島征伐は、当初の目的を十分に果たすことはできなかったが、倭寇の根拠地に対する直接的な武力行使で所定の目的は達成した。

1419年の対馬島征伐直後に交易が断絶すると、生存の危機に瀕した対馬は交易再開を要請し、朝鮮では対馬島主の政治的立場を擁護しながら、その地位を利用して対日通交体制の一元化をはかった。すなわち、交易が断絶すると、対馬島主は対馬を朝鮮に帰属させ、印章を与えてくれれば全ての命に従うと要請してきた。これを契機に朝鮮は、渡航者の制限を誘導する一方、

島主は島内の支配権を強化したのである⁶²⁾。よって、1419年の対馬島征伐は単純な襲撃事件ではなかったのである⁶³⁾。

次に、1510年の三浦倭乱の性格は、三浦が交易のために日本人の居住が認められた開港場として、次第に密貿易の温床になったために朝鮮が統制を加えたところ、これに不満を抱いた居留民が対馬島主の支援を受けて起した暴動である点は明らかである。

三浦倭乱の経緯を見てみると、朝鮮は建国後、国防問題を勘案して無秩序に入国する倭寇や倭人を統制するために、1407年に富山浦(釜山浦・釜山)と乃而浦(薺浦・鎮海)を開港し、1426年には鹽浦(蔚山)を開港して入国する日本人の交易や接待の場所とした。そして、朝鮮ではこの三浦に限って日本人の来往を許可し、恒居倭人として60戸(乃而浦30戸、富山浦20戸、鹽浦10戸)の長期滞在を認めた。しかし、倭人はこれを守らず、引き続き三浦に入って居住し、毎年数が増加して1494年には525戸、3,105人に上った。数が増加することによって、政治的・社会的に大きな問題となった。朝鮮政府では1506年、中宗代になってから倭人に対する統制を始め、これに反発する倭人の不満が高まり、それ以来朝鮮人との衝突が頻発するようになった。

<三浦の恒居倭人数>

	世宗初		1466年		1475年		1476年		1494年	
	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口	戸数	人口
薺浦	30	・	300	1,200余	308	1,722	308	1,731	347	2,500
釜山浦	20	・	110	330余	67	323	88	350	127	453
鹽浦	10	・	36	120余	36	131	34	128	51	152
計	60	・	446	1,650余	441	2,176	430	2,209	525	3,105

1510年4月、薺浦の恒居倭酋である大趙馬道と奴古守長らが、対馬島主の子の宗盛弘を大将として4,000から5,000人を率いて富山浦を攻撃して釜山僉使・李友曾を殺害、乃而浦を攻撃して僉使・金世鈞を拉致した後、熊川と東萊を包囲・攻撃し、三浦倭乱が始まった。朝鮮政府では、前節度使・黄衡と前防禦使・柳聘年をそれぞれ慶尚左・右道防禦使に任命して三浦に送り、鎮圧させた。この結果、宗盛弘は殺害され、三浦居住の倭人は全て対馬に逃走し、乱は平定された。この乱で朝鮮側は軍民272名が死亡し、民家796戸が焼けた。一方、倭船5隻が撃沈し、295名が斬殺された。この三浦倭乱を契機に、三浦は閉鎖されて通交が途絶え、1512年の壬申約条によって再開された。

以上のように、三浦倭乱の顛末をみると、三浦倭乱の原因は三浦の恒居倭人が60戸の約定を破り、無分別に居住者が急増し、その始まりも恒居倭人が倭館から勝手に境界の外に出て朝鮮側を攻撃したことによるのである。

⁶²⁾ 孫承喆、『近世の朝鮮と日本』明石書店、1999年、参照。

⁶³⁾ 中村榮孝、『日鮮関係史の研究』上、「朝鮮世宗己亥の対馬征伐」(吉川弘文館、1967年)参照。

5) 偽使問題

一方、この時期の韓日関係史研究で非常に重要な主題であるにもかかわらず、両国の概説書で全く触れられていない主題が偽使問題である。幸い今回の第2分科の主題のうちの一つに選定され、共同研究の第一歩を記したのは第2分科の大きな成果のうちの一つである⁶⁴⁾。むろん、未だ初歩的な段階であるため、概念定義や時代区分、偽使の発生原因や偽使の類型、偽使に対する両国の認識や対応など、多くの問題が山積している。しかし、偽使問題の究明こそが、朝鮮前期の韓日関係史の諸問題を包括的に説明しうる鍵を握っている。こうした意味で今後韓日両国の研究者が大きな関心をよせることが求められる。

5. 結論

以上において、現在、両国で読まれている概説書に表れた中・近世の韓日関係史に関する記述傾向を比較・分析した。比較・分析の結果、両国の概説書はほとんど同一の主題を扱っていることがわかった。しかし、同じ主題を扱いながらも、記述においては部分的にかなりの違いを示している。たとえば、倭寇の構成、朝日通交の性格、豊臣秀吉の朝鮮侵略、通信使の認識などにおいて非常に異なる記述がなされていることが確認された。今後、こうした相違点に対して両国の研究成果が十分に反映されて望ましい韓日関係史を記述するために、いくつかの提案を行って結論としたい。

第一に、まず、両国関係の基本的な歴史事実には忠実でなければならない。つまり、高麗前期の進奉船貿易を通じた関係や倭寇の構成員・性格に関する記述、通交の契機や過程、三浦を通じた両国の平和的通交関係、壬辰倭乱の原因や性格についての事実に関する記述、両国の被害状況、国交再開のための両国の努力、通信使の性格や役割、釜山倭館を中心とする両国の平和的通交関係などが、事実により忠実に記述されなければならないだろう。

第二に、韓日関係史が事件中心ではなく、通時的な記述がなされなければならない。一般的に、前近代の国際関係史を記述する際、常に戦争史、または事件中心の歴史を記述する。しかし、韓日関係だけを見ても、葛藤の時期よりも平和的、友好的な時期のほうが長い。こうした点から記述方式を変えなければならない。中・近世の場合、進奉船の時代から倭寇の時代へ、また、朝鮮前期の三浦を通じた通交時期から壬辰倭乱へ、そして、通信使と倭館の時期から開港期までの間は、対立や葛藤よりも友好交隣を強調した時期が長かったのである。

第三に、自国の立場だけを強調する一国史的で一方的な記述から離れ、客観化する記述が必要である。つまり、韓日関係史が基本的に両国の関係であるだけに、一方の状況だけを記述してはならず、双方の立場を偏見なく記述しなければならない。たとえば、壬辰倭乱について記述する場合、日本の侵略性を明らかに記述し、それによる朝鮮人の被害を通じて両国間に二度とあ

⁶⁴⁾ 韓文鍾「朝鮮前期の倭人統制策と通交違反者処理」(2003年12月、第9回合同分科会の発表文)と、伊藤幸司「中世日朝関係に見える偽使の時代」(2004年3月、第10回合同分科会の発表文)参照。

ってはならない不幸な戦争であったことを確認できるようにしなければならない。

第四に、この時期の両国関係史を正確に把握している専門家が執筆するべきである。概説書の中には誤りが少なくなく、また、最近の研究成果が十分に反映されないまま、既存の成果を踏襲した記述が少なくないためである。もちろん、両国の概説書については、執筆者の構成や方式には多くの違いがある。しかし、概説書は自国史を理解するための基本的な学術書であるので、この点が十分に考慮されなければならない。

第五に、対立や葛藤の悪循環を止揚して望ましい韓日関係を構築していけるように、韓日関係史の肯定的な側面を強調して記述しなければならない。たとえば、朝鮮前期の三浦、朝鮮後期の通信使や釜山倭館を通じた通交関係において、両国間には友好交隣を象徴する事例が多い。こうした点を強調して、対立や葛藤よりも友好や共存の歴史が記述されなければならないだろう⁶⁵⁾。

⁶⁵⁾ こうした観点から、これまで7回にわたって行われてきた教科書改善のための韓日共同学術セミナーの今後の見通しは非常に明るい。本人も2003年12月29日、韓国精神文化研究院で開催された第7回教科書改善のための韓日共同学術セミナーに参加し、「中・近世の韓日関係史に関する両国教科書の記述傾向」につき発表した。

討論記録

主題：「中・近世の韓日関係史に関する認識の共通点と差違点」

発表者：孫承喆委員

○日時：2004年3月14日 14時10分－16時30分

○場所：釜山 パラダイスホテル

○参加者：

（日本側）吉田光男委員、田代和生委員、六反田豊委員、伊藤幸司協力者、
米谷均協力者

（韓国側）孫承喆委員、趙珖委員、鄭求福委員、韓文鍾研究員、洪性徳研究員、
朴哲暎研究員、張舜順研究員

趙珖 孫先生は40分で発表を終わらせてくださいました。ありがとうございます。孫先生の発表に対する討論に入ろうと思いますが、日本側のどなたからご質問くださいますか。

六反田 時間を省略する意味もありますし、それからあまり複雑なことを申し上げると、通訳の方も大変でしょうから、できるだけ簡潔に申し上げます。大きく3つのレベルで孫先生にお伺いしたいことがあります。

そのうち1つは、事実関係の確認ということで2つお尋ねをいたします。日本側の概説書で4種類あがっていますが、これは多分単純なミスだと思いますけれども、最後の『Story 日本の歴史』というものが、これは出版社がついていないのですが、これはどこから出ているのか教えていただきたいのが1つです。

2つ目はここで取り扱う時代の設定をしてあります。そこで、韓国の中・近世というのは、韓国の場合は高麗時代から朝鮮時代の開港前まで、それから日本の場合は平安時代中期以降から徳川幕府末期までというふうになっています。韓国の場合、もちろん、いろいろ違った意見はあるのですが、大体高麗時代から朝鮮時代が中世・近世というのは一般的にそのように大多数の見解として、一般的にはそういうふうに理解されているということは分かりません。問題は日本のほうで、ここでは日本の中世・近世が平安時代中期から徳川幕府末期になっていますが、そういう見解もあるのかもしれません、私たちの一般的な理解では、中世というのは鎌倉時代から始まるのではないかと、つまり12世紀の終わりです。そのくらいから始まるのだと思うのですが、ここではどうして平安時代中期というふうになっているのか、もし理由があったら教えていただきたいということです。以上が事実関係について確認したいことです。

次に、今度は、次のレベルの問題として、ここで分析の対象にされている概説書について

少しお尋ねをしたいと思います。

1つは韓国側の概説書として、ここに4種類の概説書があがっています。このうちの『韓国史新論』、それから『韓国通史』、この2つについてお尋ねしたいのですが、言うまでもなく『韓国通史』というのは韓 祐 先生がお書きになったもので初版は1960年代ですね。それから『韓国史新論』は李基白先生でこれは1970年代の初めぐらいですか、ちょっとはつきり覚えていませんけれども、つまり出てからかなりの年数がたっていると思います。もちろん、ここでは改訂版をお使いですから、それは分かるのですが、具体的にその改訂、元の初版と改訂版で随分記述も変わっているのではないかと思うのです。つまり新しい研究成果を入れて、記述が変わっている部分がたくさんあると思うんですけども、ここで先生が比較で分析をあげられている部分については、その点がどういう、初版と比べて随分変わっているのか、あるいは変わっていないのか、それがもし分かれば教えていただきたいということです。

日本側の概説書として4種類のものを選択されていますけれども、これを見ますと、それぞれの書物、例えば『概論日本史』、あるいは『教養の日本史』というの是一般向けの概説書だと思うのですが、随分性格の異なるもの、私も『Story 日本の歴史』というのはいくぶん分かりませんが、ちょっと性格の異なるものも入っていると思うんです。具体的に申しますと、この『詳説日本史研究』は、これはどういう書物かご存じでしょうか。簡単に言うと、つまりこの『詳説日本史研究(韓国語)』というのはいくぶん性格の書物なのかご存じでしょうかということをお聞きしたいということです。以上が書物、取り上げた概説書についてのお尋ねで、今度は最後に内容、分析についていくつかお尋ねしたいと思います。

この研究といいますか、論文の目的として、序論のところでは先生はこういうふうにお書きになっています。日本語のほうを読みますと、上から3行目のところですが、「こうした作業は中・近世の韓日関係史に関する記述において、現在両国間で学術解釈上違いがあると考えられている争点は何であり、その争点のうちどのような内容に共通点と相違点があるのかを正確に把握することによって、相互間の理解や認識を深めようとするに目的がある」とおっしゃっています。

ところで、結論のところを見ますと、最後にいくつかの提案ということで5つ提案がされています。そのうちの4つ目の提案のところでは「この時期の両国の関係史を正確に把握している専門家が執筆するべきである。概説書の中には誤りが少なくなく、また、最近の研究成果が十分に反映されないまま、既存の成果を踏襲した記述が少なくない」とお書きです。全くその通りだと思うのですが、そうしますと、最初に両国間で学術上解釈の違いがあると考えている争点というものが、充分には今の概説書には反映されていないことになります。つまり、我々専門の日朝関係史、韓日関係史の最新の成果はなかなか反映されていないということになると、学術解釈上の、一般的に、あるいは通説的な理解の相違点は分かるかもしれませんが、学術解釈上、あるいは、専門的な最先端の研究における解釈上の違いというのが、果たしてどの程度その争点というものが分かるのかと思うのですが、その点について、お

考えをお聞きしたいと思います。ですが、実際に見ますと、実は最新の成果も反映されている部分もありますよね。倭寇について、3の「共通点と相違点」というところを見ますと、そこで書いてます。日本側の、一部のものでしょうけれども、例えば、『概論日本史』では、倭寇につき、民族や国境を越えて連合した勢力と見て、1350年以降に朝鮮半島で活発化した倭寇は、対馬や壱岐、北九州を拠点とする日本人や朝鮮人を主力としていたと記述している。あるいは『Story 日本歴史』でも、日本人や朝鮮人、もしくはその混血を中心とした雑居集団と記述しているとありますが、これはまさに最近の日本の倭寇研究の成果を反映しているのではないかと理解します。

一方、韓国側の概説書で倭寇の実態を日本の没落した下層武士と書いているのも、これは多分韓国人のある研究者の成果というものに依拠しているもので、そういう意味では最新の成果も出ている部分もあると思うのです。まさにその点が学術解釈上の争点だと思うのですが、つまり私が何を言いたいのかと言いますと、この論文を読んだ限り、従来までの通説的な理解を引きずっている部分と、最新の研究成果が反映されている部分と、区別してどうか、分かるように書いて、ここが問題なのだと指摘していただいたほうが、読んでいるほうは大変分かりやすかったと思うのです。その点について先生、これお書きになっていろいろとお考えとかもしあったら、お尋ねしたいということです。以上です。

孫承喆 いろいろな指摘ありがとうございます。基本的に両国の概説書にある事実を整理したもののため、あまり質問はないだろうと思っていましたが、今数えたら6つになります。ありがとうございます。

まず『Story 日本の歴史』についてですが、私がこの四冊の概説書を選ぶにあたって悩み、心配だったのは、果たしてこの四冊が日本の概説書の代表といえるのだろうか、ということでした。しかし、先程も申しましたが日本の書店に行った時にはこれらの本が一番目につき、また出版元も日本国内で有名な会社でありましたし、また私の個人的な知り合いからも紹介を受けました。それでこの四冊を選んだのですが、委員の皆さん、研究協力者の皆さんから、もっとよい概説書があるということでご紹介いただけましたら、今後この論文を完成させる際にその本の内容も反映してより忠実な論文となるよう努力したいと思います。これは韓国側の概説書についても同様ですので、韓国側の先生方にも同じようにお願いしたいと思います。

最初のご質問の『Story 日本の歴史』についてですが、これは編者が日本史教育研究会となっています。そしてこの研究会の会長は、菱刈隆永さんです。また、編集委員が6人になっておりまして、2001年に山川出版社から出版されています。また原本は重いのでコピーをご参考いただければと思います。

2番目の質問は時代区分に関するものですが、これも六反田先生のご指摘通り問題が多々あります。しかし、私がここで平安時代中期からとしたのは、特別な理由はありません。高麗時代に合わせた結果そのようになったのですが、日本の学界では鎌倉時代、すなわち12世紀中盤からとしているということであれば、今後その点をはっきりと留意していきたい

と思います。

鄭求福 その点について少し申し上げます。時代区分について、日本側では中世ということで鎌倉時代からということですが、それはこの第2分科の正確な時代区分ではありません。第2分科は古代史以後のことを扱うため、10世紀からを対象と見なければならぬと思います。

六反田 私の言いたいのはそういうことではなくて、そういうふうにはちゃんと規定していただければそれでいいのですが、ここでは中・近世とは韓国の場合はこれこれ、日本の場合はこれこれと書かれているので、そういう書き方をされると、これは日本では一般的な時代区分では鎌倉時代以降が大体中世ですから、誤解を招くと思うのです。

孫承喆 わかりました。私がタイトルで「中・近世」とつけたため、ここで論じる内容の時期をそのように区分したものであって、時代を規定したものではありません。誤解の余地がありますので、修正いたします。

それから分析の対象とした概説書のうち、韓国側の四冊に関して、特に『韓国史新論』と『韓国通史』についてですが、ご存じのように李基白先生の『韓国史新論』は、初版が1960年代に出されたものです。韓治功先生の『韓国通史』も20～30年前に出たものです。ですので資料として少し古いのではないかとというご指摘と、改訂版、修正版も出ているので、どの部分が改訂されたのか区別してもらえればというお話でしたが、一理のあるご指摘であり、私の方でも初版との差異は把握しております。しかしここでは定められた主題についてのみ扱いましたので、そこまで明示することが出来ませんでした。しかし、相当な部分変わった部分があります。古い本ではありますが、数度の改訂版が出され、現在も最も多く読まれている本ですので、これらを選定しました。

日本側の概説書について、『詳説日本史研究』ですが、これがどういう性格のものなのか知っているかというお話でしたが、よく知りません。ただ、詳細に記述されており、執筆者名簿を見ると色々な大学の先生が参加しておりますので、また、どこの書店に行っても目につきました。またこの本を推薦してくれた方もいらつしゃいましたので、この本を選定しました。どんな性格の本なのか、この場で説明していただけますか。

六反田 この本は、多分どこの本屋でも売っていると思うんです。なぜか、これは高等学校の高校生が、大学受験をするための受験参考書です。私も大学受験でこれを使いました。だから、ここで言う一般人、もしくは大学生に読まれている韓国史と日本史の概説書という場合には、ちょっと性格が違うかなと思います。もちろん、韓国側でも、そういう受験参考書でどう書かれているかということで、両方で比較するのであれば、それはそれで意味があると思いますけれども、ちょっとそこが違ったので、さっきああいう質問をしました。

孫承喆 その点は今後十分参考にいたします。

最後の質問ですが、序論の部分でこの論文の目的について述べ、また結論部分では今後望ましい概説書となるためにはこのような部分が反映されればということを書きました。まず序論の部分で、「中・近世の日韓関係史に関する記述において、現在両国間で学術解釈上違いがあると考えられている争点が何であり、その争点のうちどのような内容に共通点

と相違点があるのかを正確に把握しようとするものである」と述べました。ところでこの内容は、これまで数回にわたって開催した合同分科会で言及されてきた内容です。つまり、我々韓日歴史共同研究委員会の最も基本的な目的に該当する部分です。この部分が、今後どれだけ、我々が問題意識を正確に相互の間で共有する必要がある、つまり、どのような部分で考えが違っているのか、まずそれを確認することが必要ではないか、このような考えで、問題提起をしたものです。我々はこれについて第1回の会議の時から話をしてきました。我々共同研究委員会の目的が、現在争点となっている部分についても相互間で望ましい方向を模索し、また争点にはなっていない部分についても、今後我々が共同研究を行っていく分野ではないか、このようにして研究テーマが決定したため、これらをすべて含めて、前向きに接近していこう、このような視点から問題提起をしたものです。

最後に、結論部分において概説書の執筆に専門家が参加すべきであると述べた部分ですが、先生のご指摘どおり、ある部分では最近の研究まで取り入れ、例えば日本の倭寇に関する記述は、ごく最近の研究成果まで含めています。しかし他の部分には最近の成果までは含めておらず、また両国で概説書を執筆する執筆者の構成が相当に異なっています。そこで、私がここで述べているのは、すべての主題についてそうだとということではなくて、一般的にそういうことが要求されるといって一般論をここで述べたものと理解していただければと思います。しかし、この部分がいきなり論争になる部分です。つまり、先生が先ほどおっしゃったように日本では倭寇についてこのように記述しているのに、韓国ではこのように記述している、なぜ違うのか。しかし、我々が時間的に今回の会期に、つまり我々の分科は今回が最後の発表会ですが、今回そこまで扱うのは困難だと思いました。ただ、我々が出来るのは両国の記述が、表現がどう違っているのか、それを確認するだけでも、我々の研究委員会が一つの役割を果たすことになると思います。

六反田 ですから、私が申し上げたことは、この比較することも意味があるということはもちろんそうだと思います。ただ、その場合に、今までの両国の通説的なものをずっと引きずっている部分と、それからどこがどう変わってきたのかという部分に分かるように比較をしていただいたほうが、つまり日本ではこういう部分については最新の研究成果が反映されているけれども、この部分については依然として昔のものだと、韓国ではそうだと、ということが分かるような形で比較をしていただいたほうが、もっと意味があるのではないかと考えたので、先ほどのような質問をいたしました。

趙珖 わかりました。孫先生、もうこれ以上お話はありませんね。それではどうぞ、吉田先生ご質問ください。

吉田 私は3つほどお聞きしたいと思います。簡単な部分から基本的な原則についてまでです。まず簡単な方ですが、先生はこれらの本を選定した理由について、日本語版27頁(最終報告書549頁)の註1、韓国語版では1頁の下側註1にこのように書いています。「これらの書籍を比較対象に選定した特別な理由はない」。本当に不思議です。当然理由があるべきだ

し、その理由がなければ学術的な検討対象にはなり得ません。その理由は次です。この本を選択した理由について実は書かれています。書店で手に入れることができたとあります。どこの書店で手に入れたのでしょうか。かつまた、両国の学者に諮って選定したものとあります。どのような学者、特に日本の概説書について、この選定に協力した学者の名前を教えてください。なぜならば、4冊選ばれたうちの1冊は、先ほど六反田先生が明らかにしたように、これは明らかに概説書ではありません。受験参考書です。それから2番目、『Story 日本の歴史』、私、これ初めて見ました。日本の出席者も誰も知りませんでした。なぜか、執筆したのはすべてここに執筆者が出ておりますが、高校の先生方です。しかもこれ、学術書でないのは、参考文献には新書版が少しあがっているだけで、具体的な研究ではないのです。つまり、いわゆる教育者が書いたもので、読む対象は高校生です。これは一体誰が選んだのか、それを2番目に教えていただきたい。これを先生に諮った日本人の学者について教えていただきたい。

それから2番目の質問ですけれども、韓国版 23 頁、日本語版 26 頁(最終報告書 578 頁)の一番最後に、結論として、概論というものについて学術書というふうに規定がされております。従って専門家が執筆するべきだと書いてあります。そもそも概論書というのが、学術書であるかどうかというのは、疑問があります。そして、さらにその場合、概論書は誰を対象として書くのでしょうか。我々学術書を書くとしたら、それは専門家を対象として執筆いたします。

そして最後は、この研究会、とりわけ、我々の第2分科の基本的な方針にかかわる問題です。もちろん、韓国と日本のこの時代、中・近世にかかわる関係史を中心とした歴史認識に対する問題というのが、ここでは中心的なテーマだと当初考えられました。しかしながら、これは討論の中で、具体的に研究者が最新の研究をした結果を両者の間で討論し、それを社会に対して発信しようと、そのように考えたはずです。従ってそのような前提の下に研究協力者も、例えば、ここにいる伊藤さん、それから米谷さん、今日は欠席していますけれども、橋本さん、それから韓国側の3人の韓文鍾先生などもすべて専門的な研究者が自分の専門についてここで発表されたわけです。ところが、本日の発表を見ますと、4冊中2冊は専門的な本ではないです。少なくとも専門的な学術書ではない。1冊は受験参考書であり、1冊はこれ、どのように見ても高校生を対象とした参考書であって学術書ではないし、最新の研究をここで書くというのも変な話なのです。だから、それがここで対象としてあがってくるというような方向性というのが、我々のこの分科会の共通の認識であったかどうかということを再び伺いたいと思います。

孫承喆 ご指摘ありがとうございます。ただもう少し和気合合とした雰囲気が進められればと思います。私は韓国と日本の書籍4冊ずつを選定したわけですが、2冊については異議はありませんか。

吉田 私はそんなことは全くお話ししておりません。それについてお答えする必要はありません。

孫承喆 そうですか。先ほど、選定の本について六反田先生も指摘されましたが、よい本があれば

推薦してください。私がここに選定した理由はないとあえて書いたのは、これまで我々が対立がしていたため、私が目的を持って意図的に行おうとしたのではないかという誤解があったのではないかと考えたからです。実際にはこのような注をつける必要もないでしょう。それから概説書は誰を対象として書くのか、概説書は学術書ではないというお話がありましたが、私の考えは違います。概説書こそ学術的な学問研究の業績を全体的に集めて、それを理解しやすく書いたものだと思います。したがって、概説書は学術書ではないというのは少し間違った考えではないかと思います。

それから「詳説日本史」についてですが、韓国であれば中高校生が入試用に使う参考書には「受験用」といった表示がされています。私が三省堂等の日本の書店に行った際には、この本が他の一般学術書と一緒に同じ場所に陳列されていました。それで、これについてこれ以上討論する必要はないと思います。もし私の図書の選定が間違っていたのならば変更すれば済むことですし、参考にすれば済むことなのに、それを一方的に非難してはならないと思います。

趙珖 討論が熱を帯びてきましたが、このような場合には少し息を抜いた方がいいかと思いますので私が発言いたします。共同研究委員会の合同会議は、互いの意見を調整し、反映して互いによりよい論文を作成するために共に協力することに目的があるのではないかと思います。したがって、この点を念頭において討論を進めていただければと思います。

吉田 理解いたします。それで、私の質問に1つ答えていただけていないことがあり、これが大変重要なのですが、もちろん、選択する時に私たちも誤りはあります。誤った場合には私は素直に認めます。ただし、その場合に誤りを指摘してくれる専門家がいます。孫承喆先生も、慎重に両国の学者に諮って選定したと書かれているわけです。日本の本については、どなたがこの選定をしたのか、そこが非常に不思議で、私には理解できないのです。

孫承喆 私の表現に問題があるのですが、実際には4冊とも日本の学者の推薦を受けたわけではありません。概説書について伺ったところ、1冊紹介してくれた方もいますし、2冊紹介してくれた方もいますし、概説書についてはよく知らないという人もいました。もしこのような本が問題になるのであれば、皆さんの意見を伺って、また私的な席でも「こんな本を見てみたら」というようにご紹介くだされば、今後参考にして論文を完成させるのに役立てたいと思います。

趙珖 それでは他の先生方からも質問を伺いたいと思います。田代先生どうぞ。

田代 研究史の中で、先行研究をまとめてどこまで分かっているどこまでが分からないかということ、去年作業としてやりました時に、私たちは概説書、それから一般啓蒙書はすべて外しました。これは学術的な書物ではない、つまり専門書ではないということで外したのです。それは、結局、専門家が執筆してないからなのです。歴史教科書とかそういった概説書を見た時に、私もいつもそう思うのは、孫承喆先生がここに書いているように最新の研究がほとんど反映されていないのです。で、後追いでそういうのは来ます。後追いで来るのですが、それは執筆者にとって一番書きやすいところだけをただ取って、後追いで書いてくる。例え

ば、倭館がこんなに大きかったと、そういう紹介だけはするのですが、しかし、通信使の正体とかそういうものをきちっと考える訳じゃないのです。それが専門家ではない人が書く概説書並びに一般書なのです。やはり、この研究会では、一般国民の人たちの共通点、相違点を探るのではなくて、研究者としてどこまで何が分かっているのかということを探ろうということで、先行研究をあさり、そして新しい研究をこういうところで発表しているのだと思うのです。ですから、素材にしているのがやはり、今、問題になっているように概説書を、書店においてある、つまり書店の側にその評価を任せてしまった、その書店のそこに置いてあるものを選んでしまったというところに、あるのではないかと思います。もう少し学術書、専門書でもって同じようなレベルで対比させてみないと、どこまで認識が分かっているか、分かっているかを探るといっては、非常にこの研究会のあり方と違ってきてしまうと思います。

孫承喆 私はこのような話が繰り返されるたびにこの韓日歴史共同研究委員会をなぜやっているのか、なぜ自分がこの席に座って苦痛を感じなければならないのか、懐疑の念を抱きます。我々韓日共同研究委員会の第1分科の主題は3つ、第2分科も3つ、第3分科は13となっています。この席に参加している両国の委員各3人、そして研究協力者の皆さんは、中近世の韓日関係史分野に関しては両国国内で指折りの専門家でいらっしゃいます。そのため、両国間で歴史的に争点となっている問題がどういう問題なのかということについても一番よくわかっていると思います。

しかし我々がこれまで10回の発表と討論を行いました、そのような問題点について心を開いて、率直に、そしてこれの問題が望ましい形で解決されるためにはどの方向に行かなければならないのか、このような点について、まだやらなければならないことはたくさんあると思います。

私が概説書を選定した理由は、選定に誤った部分があったことは認めます。先生方のお話を伺って、もっと正確に選定しなければならないと思いますが、概説書が学術書か否かといった問題は扱いたくありません。しかし皆さんご存知のように、この歴史共同研究委員会は中高等学校の歴史教科書のために作られたものではないでしょうか。それで、10回の合同分科会を開きましたが、最後ではありますが、中近世韓日関係史の両国間の争点は一体何なのか、それを我々が共に認識することだけでも一つの成果ではないかと考えてこのような問題提起をしたものです。そしてここから論争が始まるのであれば、大変な論争になると思います。私はそこまでやりたくはありません。ただ、問題意識は共有しながら今後共同研究を、他の分科ではやられるかどうかわかりませんが、我々はここまでやることで自分の任務を果たすことが出来れば、という純粋な気持ちから、このように問題提起を行いました。

吉田 実は、私も韓国と日本の間のいろいろな学術会議に出たり、シンポジウムに出ましたけれども、非常に今回は率直に批判の意見が出たり、同意の意見が出ました。これは従来の比較的友好的な会議とは違ったことだと思いますけれども、実は研究、学問、あるいは歴史認識を深めるためには、必要な過程だったと思います。それで、今、思い出すのは、確か第1回の会議だったと思いますけれども、趙珖先生がおっしゃった言葉です。歴史の共通認識を

作るのではなくて、それぞれが違う認識を持っているという事を認識するのが共通の認識であると。

趙珽 ありがとうございます。我々が10回にわたって議論を行う間、色々な話が出て来たと思います。公式的な会合としては本日の会合が最後になります。最後の会合ですので、孫承喆先生の発表以外についてでも、我々の会合について今後1年間のことではなく、全体を締めのお話があれば簡単にお話いただければと思います。伊藤先生や米谷先生からご発言がありませんでしたので、一言いただければと思います。申し訳ありませんが、時間がありませんので、要点のみ簡潔にお話いただければと思います。

伊藤 それでは簡単に2点ほど。1つは蒙古襲来のところの記述で、韓国側の概説書によりますと、日本でよく取り上げられることが最近多い、三別抄の乱というのがあるんですけども、これは韓国史のほうではどのように評価されているのかというのが、ちょっと私、不勉強で分かりませんので、それを教えていただきたいという点。

もう1点は日本側の原稿ですと8頁(最終報告書555頁)です。琉球、南蛮との交渉というところで、琉球にとどまりながら、南蛮貿易に従事した朝鮮人がいたということだと思わなすけれども、これについて、孫先生がもう少し検証が必要であるとコメントされています。私の知る限り、こういう事例はないと思うので、これは検証というレベルではないような気がするんですけども、いかがでしょうか。以上です。

趙珽 孫先生、二つの質問について簡単に答えてください。全体的な感想のようなものを期待したのですが、大変具体的な質問です。

孫承喆 三別抄については重要な事件であるだけに、全ての概説書に記述されています。しかし、日本との関連での記述されているのではなく、主に高麗の蒙古に対する抗争の部分において、三別抄が最後までこのように抗争したということだけが記述されています。そのため私を含めませんでした。もう一つについては私も伊藤先生と同じ考えですが、朝鮮人が琉球に漂着してそこに滞在しながら南方貿易に従事したということですが、私もここで初めて見ました。それで、ここで考証といっているのは、その意味です。韓永愚先生は現在翰林大学の招聘教授でいらっしゃいますので、私が明日にでも一体どうなっているのかと伺って見ます。

趙珽 鄭求福先生、ご発言ください。

鄭求福 我々日韓歴史共同研究会第2分科の発表は、今回が最後です。韓日両国の歴史学者がやらなければならないことは、一つの事件について互いの立場が異なることによって解釈を異にする問題を我々が発見し、それについて相互が理解することによって歴史理解について接近しようというというのが本当の意味だと思います。両国の歴史は、日本史だけでなく、韓国史も自己を中心とした立場から叙述する自国中心主義の歴史観が強く反映されています。しかし、この両国が共に関係する共同事件については、自国の立場からだけ解釈しようとせず、他国の立場からも解釈しようとする、このような謙虚な姿勢が必要だと思います。したがって過去の歴史事実を明らかにすることだけが問題なのではなく、韓日関係史を通じ

て、今後の韓日関係史が友好的な、互いに争う歴史ではなく、友好的な歴史を作ろうというのが韓日歴史共同委員会の重要な目標であると思います。このような観点から孫先生の発表について申し上げるならば次の通りです。両国の概説書を書いた人々の歴史観は果たしてどのようなものなのかということに対する著者の序文ですとか、他を通じてそれを明らかにしていればこのような違いという点に、違いの理解に役立ったのではないかと思います。そしてもう少し具体的なことを言えば、壬辰倭乱についての叙述が、韓日両国においてすべて朝鮮と日本間の戦争として叙述されていますが、これは間違いです。直接的には朝鮮と日本の戦争ですが、明も参与した国際戦争だったということが、両国の概説書に誤って叙述されています。

趙珖 今回の会議はそろそろ終りに近づいてきましたが、具体的な事実についての指摘はたくさんあるかと思いますが、ですがそれよりもこの会議についての全体的な感想や、今後どのようにやっていくことで望ましい我々の未来を切り開いていくところ出来るのかについて簡単に述べていただければと思います。

吉田 すみませんが、まだ発言していないので残念がっている人が。

趙珖 そのままではいけませんね。一言どうぞ。

米谷 分かりました。概説書というよりも、啓蒙書でのこの記述の差異が、こんなにも差があるのかということに非常に衝撃を受けました。韓国側の啓蒙書の隠された願望といいますか、それがちょっと露呈しているような感じがして。

趙珖 それでは韓国側の共同研究者の中で、この学会に参加しての感想などがあれば1分以内でお話ください。朴先生どうぞ。

朴哲暁 私は今回の機会を通じて多くのことを学びました。韓日両国の研究者それぞれの研究、つまり関心の主な対象のどのような部分に違いがあるのかということもわかりましたし、また互いに韓国側は韓国側の資料のみ活用しましたし、日本側は日本側の資料のみ活用した結果相互の理解に違いが生じた部分もあったと思います。今後、相互の交流を通じてこのような部分がより客観的で、相互理解の側面からの友好的な、そのようなものが加味されていけば、ある事件や事実に対してより客観化された認識に到達するのではないかと、そのような気がしました。

趙珖 それでは、今回の会議はこれで終りにしなければなりません。我々はこれまでに10回にわたって学術的な討論を行いました。この出会いのきっかけは韓日歴史共同研究委員会から与えられました。この会議に参加した私たちは二つの責任を確認したと思います。一つ目の責任は、委員会が要求する内容でした。韓日両国の歴史認識における共通点と差異点を明らかにせよという委員会側の注文に私たちは答えなければなりません。そして二つ目は、我々は各自が研究者であるため、同時に新たな研究も進めていかなければならない、そのような責任も背負うことになりました。この二つの目的ないし責任は、我々が韓日両国の歴史を研究していく上において、今後も引き続き要求される事項であると思います。まず独創的な研究を通じて歴史の真実を明らかにし、その歴史の真実に対する共通した理

解を基盤として両国の友好的な歴史理解を増進して行かなければならないでしょう。しかし、現在まで我々が10回の会合を持つ間、この二つの目的がどれだけ遂行されたか疑問をもつ方もいらっしゃるかもしれません。しかし一つはっきりしていることは、出会いを重ねるほど互いをよく理解する機会が我々に与えられたということです。この理解を基礎として今後の韓日両国の中世史研究がより大きく発展し、中世史に対する両国国民の理解においてもより健全な理解が伸長することを願う次第です。

このために努力してくださった研究委員と研究協力者ないし共同研究者の皆さんに心から感謝いたします。そしてこの委員会は今回で終了しますが、今後さらに中世史についての問題を共同で研究する機会が引き続き与えられればありがたいと思います。今後も続く出会いに期待しつつ、これまで努力してくださった先生方に感謝いたします。以上で会議を終了いたします。ありがとうございました。